



TITLE:

中國古代における蓮の花の象徴

AUTHOR(S):

林, 巳奈夫

CITATION:

林, 巳奈夫. 中國古代における蓮の花の象徴. 東方學報 1987, 59: 1-61

ISSUE DATE:

1987-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66672>

RIGHT:

中國古代における蓮の花の象徴

林 巳奈夫

| | | | |
|--------------|-----|-----------------|-----|
| 一 序 | 一頁 | 六 天帝と日月 | 三三頁 |
| 二 所謂四葉紋は蓮の花 | 二頁 | 七 蓮の花と天帝と龍 | 三八頁 |
| 三 四葉紋と蓮の花と天體 | 一一頁 | 八 天の蓮の花と地上の蓮の花 | 四四頁 |
| 四 天の中心の蓮の花 | 二〇頁 | 九 蓮の花と山嶽、蓮の花の世界 | 四五頁 |
| 五 華蓋星と天皇大帝 | 二九頁 | | |

一 序

筆者は先に「所謂饗養紋は何を表はしたものか」の論文^①を書き、殷—西周前期の青銅彝器に多い所謂饗養が當時の最高神である帝の圖像であることを證した。その論文においては、所謂饗養が西周中期を最後に、青銅彝器の上から姿を消した後、帝がどのようなものとして表象されたかについては明かにすることができなかった。その論文の中で筆者はまた、饗養と同時代に青銅器に附けられる所謂犧首が饗養よりは一段と格は降るが、帶紋中に小さく扱はれる他の鬼神よりも上位にある鬼神であると考へた。次いで「獸饗・鋪首の若干をめぐつて」^②において、この所謂犧首の後裔が春秋、戰國から漢、六朝へと、獸饗・鋪首の形で存續し、それを全身と共に表はしたものが六朝時代に顯著となる畏獸であり、水神、山神、雷神等がその畏獸の姿をとつて表はされてゐることを闡明し、以つて先の饗養紋の論文において所謂犧首に想定した鬼神の性格の誤らなかつたことを知ることができた。饗養についての論文でとりあげた青銅彝器の圖像中、所謂犧首の方につ

いてはこれで、その歴史時代に至るまでの足跡の荒筋をたどることができたのであるが、最高神の饗養^②帝の方はどうなつたか。

西周後期から戰國時代については依然として證據を見出すことに成功してゐない。然し漢時代前後については帝の象徴的圖像を指し示すことができると思へるに至つた。それは蓮の花である。以下それについて解説を行つてゆかう。

二 所謂四葉紋は蓮の花

イーレンスヴェルトは主として戰國時代の青銅器紋様中の花の紋様をとり上げた論文の中で、漢代の器物に多い所謂四葉紋、中國人の柿蒂紋と呼ぶ圖柄（圖12）も花の紋様の一種としてゐる。^③正鵠をえた見通しであると思へる。然し同氏はそれが例へば柿の蒂とか、或いは木の葉の圖案化したものではなく、花を圖案化したものであることについては、特に論證を行つてゐない。この圖柄は後述のごとく戰國時代に型が決つてくるものであるが、それは漢人にとつてただの花ではなく、蓮の花を圖式化したものと意識されてゐたのである。

圖3は後漢の沂南畫像石墓の前室天井の彫刻である。圖3、(1)(2)の花について報告書は後漢の王延壽の魯靈光殿賦に

圓淵方井、反植荷葉

と、即ち（天井の）圓い淵と方形の井戸には蓮を逆さに植ゑる、とあるのを引き、この墓には方形の井戸だけあつて圓い淵はないが、蓮の花を使つて藻井の裝飾にしてゐる所は靈光殿と同様である、と解説してゐる。^④その通りである。同じ墓の後室の天井では圖3、(3)(4)のやうに蓮の花の兩側には斜格子を刻んでゐる。靈光殿前引の句のすぐ前に

天窓綺疏



圖2 所謂四葉紋 鏡 前漢 樋口隆康氏撮

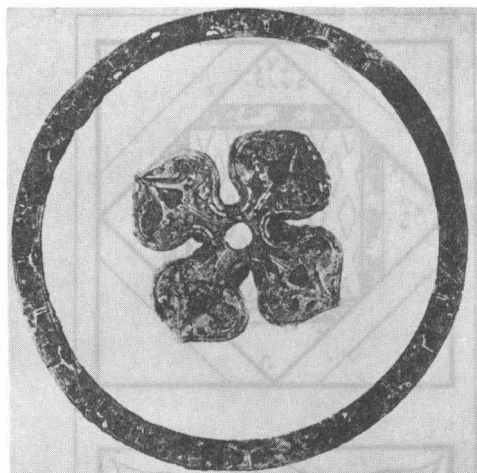
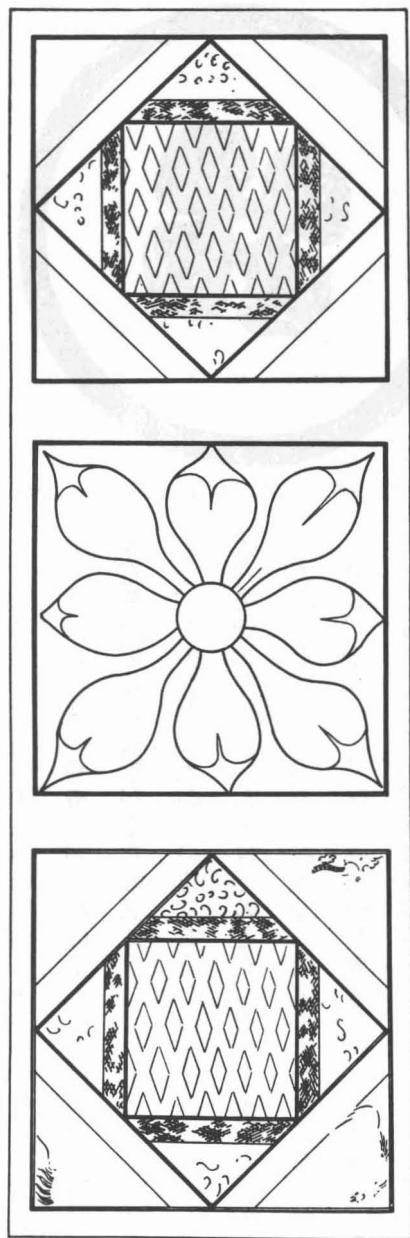


圖1 所謂四葉紋 漆奩蓋銅飾 前漢 滿城2號墓

と、即ち天窗は斜格子紋の織物の紋様のやうな形に透し彫りになつてゐる、とある。この天井の斜格子がこれに當ることは疑ひない。となると、この沂南畫像石墓の天井の石彫が靈光殿賦にうたはれる天井に該當することは益々確かであり、この花が漢人の蓮の花であることも間違ひないと考へる。漢代の墓室の天井で蓮の花を彫つた例は今のところこれと後引の圖59しか知られないが、畫いた例としてはまた密縣打虎亭二號墓のものがある(圖4)。

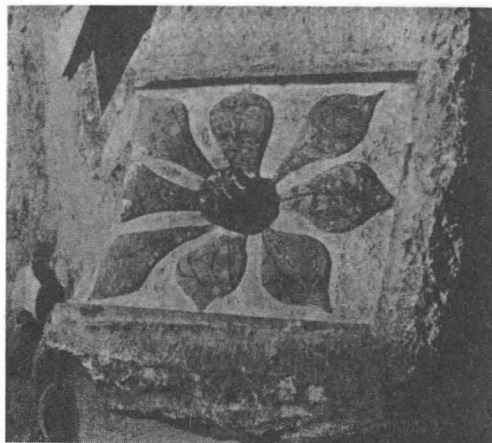
圖3、(1)(3)の例では蓮の花の花瓣は八枚に表はされ、それが方形の枠の中にまとめられてゐるが、同じ墓の中室の天井には圖3、(2)のやうに四枚の花瓣の花がある。これが八枚の花瓣を四枚に簡略化したものであることは疑ひあるまい。この畫像石墓の石彫畫像は異なつた表現技法を持つた複数の職人によつて彫られてをり、天井の蓮の花の表現が一樣でないのも、同じ事由によるものと解される。

幾人かの手になる一群の畫像石として興味深いのは圖5の例である。一九八〇年嘉祥縣の出土といふが、墓室中の使用位置は知られない。四邊沿ひの空間を埋める魚、鳥の表現は古くより知られる嘉祥縣武氏祠の畫像石とよく似てゐる。同様後漢の後半のものと考へられる。共通した圖柄のものが八個あるが、花瓣の曲線の癖によつて全部が別の石工によつて手分けして彫られたものと判斷されるが、例へば圖5、(2)のやうに花瓣が細長く、圖3、(1)(3)に近いものと

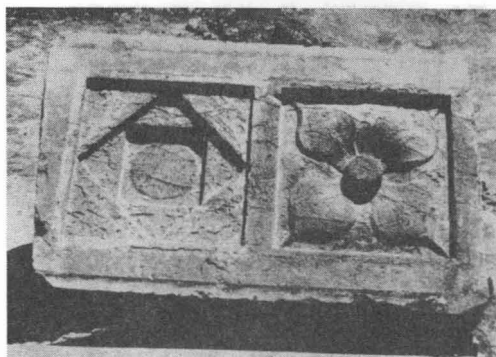


(4)

圖3 天井の蓮の花 後漢 沂南畫像石墓



(1)



(2)



(3)



(1)



圖4 天井の蓮の花 後漢 密縣打虎亭2號墓



(2)



(3)

圖5 畫像石の蓮の花 後漢 嘉祥縣宋山

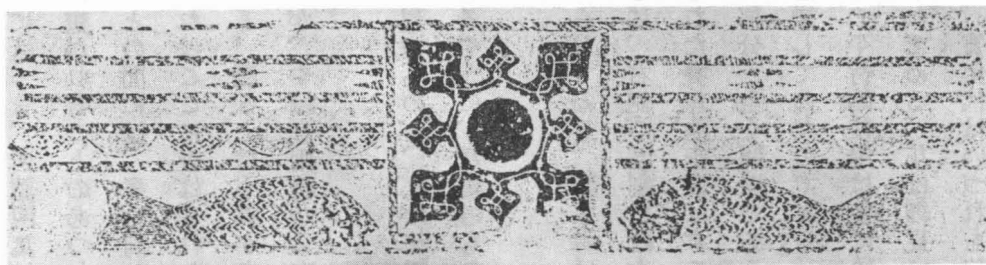


圖6 畫像石の蓮の花 後漢 肥城北大留村

並び、例へば圖5、(1)(3)の例のやうに花瓣の一番幅廣くなつた部分が極端に附け根に近づき、所謂四葉紋のものと全く同様な表現のものがある。即ち蓮の花の花瓣は様式化されて圖5、(1)(2)のやうな形に畫かれることのあつたことが、この例で明かにされるのである。枠の方形の各邊の中點を頂部とする小ぶりの花瓣と四邊との間には、多く向ひ合つた一對の魚が表はされる——圖5、(2)の下邊のやうに飛鳥の入られるものもあるが——。これはここに表はされた花が魚の遊ぶ中に咲く花、蓮であることを強調するものと解されよう。圖6も游離した畫像石である。圖5とは小異があるが、同様一筆描きの方形を花瓣に入れた八瓣の蓮の花である。花瓣の形は蓮の花のものとは遠いが、やはり兩側から向ひ合ふ一對の魚が表はされてゐる。

圖5の畫像石で知られるやうに、花瓣が多少とも細長く、現實の蓮の花に近い表現のものも、また花瓣がトランプのスペードのやうに幅廣いものも、各種が混用され、また沂南畫像石墓によつて知られるやうに、八瓣のものも四瓣のものも等しく行はれ、いづれも同時代に蓮の花と意識されてゐたことが知られた。

圖7は曲阜出土の前漢の四葉紋瓦當であるが、中心の圓の中に小さい圓點が加へられてゐる。圖8右は成都天廻山三號墓出土の池の陶製明器で、同圖左はその中の花のスケッチである。この明器を見るに、右側の區劃には大きな魚が入られ、左方には舟が浮び、圓い葉とこの花が作りつけられてゐる。これが蓮の植ゑられた養魚池を表はすことは疑ひない所である。この明器の蓮の花の中心の、雌蕊と圓い花托の表現は圖7の瓦當の中心の部分と全く同様である。この瓦當紋の作者はこのやうに甚だしく様式化された四葉紋を描きながらも、これを蓮の花と意識してゐたのである。

漢時代に認められた、多少とも細長い花瓣を持った蓮の花と太短い花瓣のものとの平行的使用は漢に始るものでなく、戰國時代に遡る。圖9は漢の玉燈であるが、足には蓮の花を伏せた形の紋様が刻まれてゐる。花は細長い型式の花瓣を持つ。圖10 11は江陵雨臺山出土の漆器の豆である。夫々雨臺山三期及び四期とされる。實年代はいづれも前四世紀位に入る。



圖7 瓦當の蓮の花 前漢 曲阜魯城

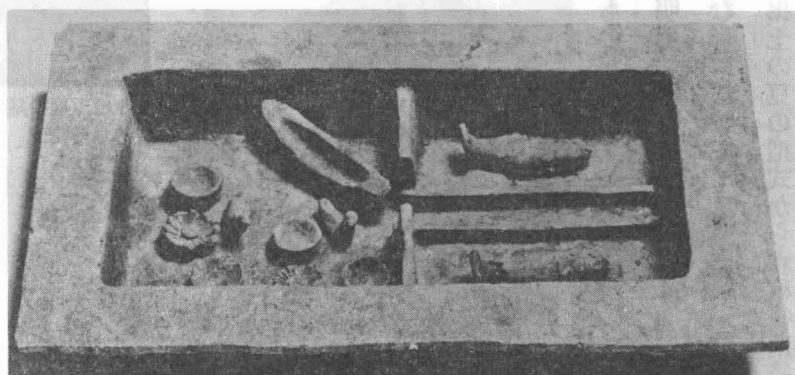


圖8 池の明器の中の蓮の花 後漢 成都天廻山3號墓

足に圖9と同じ趣向で同式の紋様がつけられてゐる。これと同式の花は圖12の洛陽燒溝出土の彩畫豆の蓋のつまみの上面にも畫かれてゐる。この豆は輝縣固圍村一號墓出土の陶豆と極めて近い形を持つ。固圍村一號墓は前四世紀後半頃のものである。圖13は汲縣山彪鎮一號墓出土の青銅器である。この墓は出土の鼎の型式から前五世紀後半頃と知られる。動物の背に漏斗形のもものが立ち、中に花形のもものが嵌る。同圖拓本に見られるやうに花瓣に鱗紋がつけられ、花托に圓渦紋がつけられるなど、現實の花の寫實とは遠いが、大ぶりの花托を持つこと、漢代のものとの比較によつて蓮のものと思われる圖1112の花と花瓣の形が近似してゐることから、これも蓮の花を原型とするものと見て差支へなからう。圖17は同墓出土の壺で、蓋に花形の飾りが加へられ、中に想像上の鳥が立つ。この方も同圖拓本に見るやうに花瓣の一つ一つにくねつた羽紋が加へられ、現實の花の寫實ではないが、花の姿は蓮の花が意識されてゐる。¹²

トランプのスペード形乃至ハート形の花弁を持った四

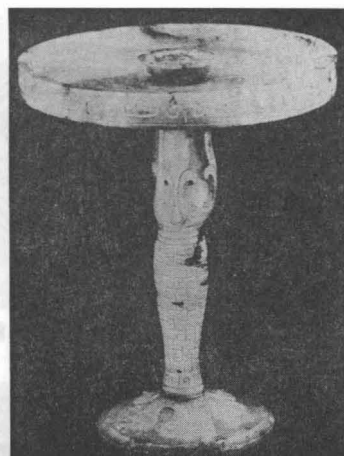


圖9 玉豆の足の蓮の花 漢 故宮博物院



圖10 漆豆の足の蓮の花 戰國 江陵雨臺山



圖12 彩畫陶豆の蓮の花 戰國 洛陽燒溝



圖11 漆豆の足の蓮の花 戰國 江陵雨臺山

葉形の戰國の例としては次のものがある。圖14は常徳の戰國時代後期とされる墓から出土した彩畫の明器。圖15は益陽の戰國時代中期の墓出土の彩畫明器。容器部の中央に今問題の四葉紋があり、その周圍から圖12に見るやうな蓮の花が細長い花瓣を閉ぢ、それを包み込む形になつてゐる。この式の花の古例としては次のものがある。圖16の長治分水嶺一二六號墓出土の鏡である。同墓出土の豆の型式から春秋後期後半頃と知られる。鈕の周圍に花が表はされる。圖17の例と同

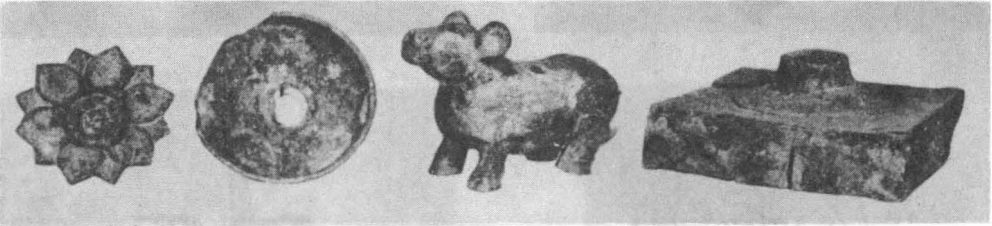
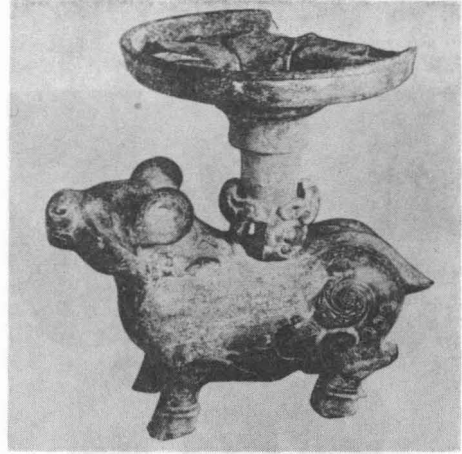
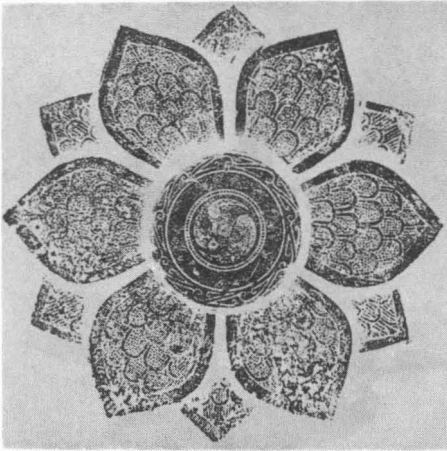


圖13 青銅器の飾りの蓮の花 戰國 汲縣山彪鎮1號墓



圖16 鏡鏡の蓮の花 春秋 長治分水嶺126號墓

圖14 彩畫陶豆の蓮の花 戰國
常德德山



圖15 彩畫陶豆の蓮の花 戰國
益陽赫山廟



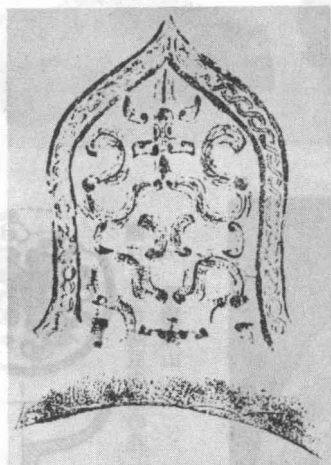
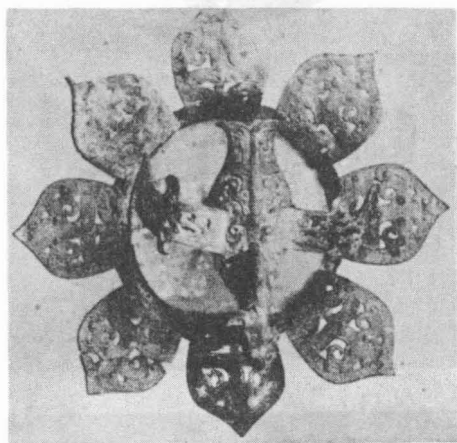


圖17 壺の蓋の蓮の花 戦國 汲縣山鎮1號墓

様、花瓣には羽紋が入れられてゐる。この幅の廣い割に長さの短い花瓣については次のやうに考へられる。圖17の右上圖に見られるやうに、始めは上に向つて出、次いで先端の方が外反りになつた細長い花瓣の花は、眞上から見ると、圖17左上の寫眞に見るやうに花瓣は幅廣く、短

い形に見えるが、それを平面に投影したのが圖16に見る形である。圖12にあるやうな花瓣の先端の一吋した尖りがこの太短い花瓣の先端に強調されると圖15のやうな形が生れるわけである。ここに同じ蓮の花で、蓮の花のものに近い細長い花瓣をもつた形から、トランプのスペード乃至ハート形の花弁を持った表現の出て來た由來が説明されたと考える。なほ圖16は鏡背紋の中心に蓮の花を配した例としては、今日知られる限り一番古い例である。

三 四葉紋Ⅱ蓮の花と天体

前節で引いた靈光殿賦の「反植荷葉」の句について、三世紀末頃の張載は

種之於圓淵方井之中、以爲光輝

と、即ち蓮の花を圓淵方井の中に植ゑるのは、もつて光輝^⑬となすのだ、といふ、光り輝くが故に蓮を天井に飾るのだ、といふ説明である。格子の明り窓と並んで蓮の花を飾る（圖3、(4)、二頁引靈光殿賦）といふのは、天井に燈りでもつけるといふのと同じ發想のやうである。^⑭蓮の花が光り輝くといふのは六朝の人の通念であつた。曹植の芙蓉賦に

其始榮也、噉若夜光尋扶桑、其揚暉也、晃若九陽出暘谷

と、即ち、その始めて花を開くや、その明るいこと月が扶桑の方に向つて動いてくるごとくであり、その輝きを發するや、明るく光ること九つの太陽が暘谷から出てくるごとくである、とうたはれてゐる。その他『藝文類聚』卷八二、芙蓉の條を見ると、六朝時代の詩賦に蓮の花を光り輝くものとうたふ例は枚舉に遑ない。

漢の例としては若木の話がある。^⑮『淮南子』墜形訓に

建木在都廣、衆帝所自上下、日中無景、呼而無響、蓋天地之中也、若木在建木西、未有十日、其華照下地

と、即ち建木は都廣にあり、衆くの帝のそれより上下する所で、日が中すると影がなく、大聲を出しても反響がない。蓋し天地の中心である。若木は建木の西にある。末端に十の日があり、光の華は下の地上を照す、といふのである。後漢の高誘はこれに注して

末、端也、若木端有十日、狀如蓮華、華猶光也、光照其下也

と、即ち末とは端なり、若木の端に十の日あり、狀は蓮の華のごとし。華は猶ほ光のごとし。その華は下地を照すなり、といふ。若木の枝の端に十の日がついてゐるが、その形は蓮の花のごとくで、その花は光輝のごとくで、下地を照す、といふ考へである。蓮の花の光り輝くものといふ通念が、若木の枝の端についた十の太陽の形に結びついてゐるのは興味深い。圖18に引いた隨州の曾侯乙墓出土の漆器の箱の蓋に左右對稱の圖柄があり、夫々の側に高低二本の木があつて、木の枝の端に光芒の出た圓形のものがつき、高い木の方は一一、低い方には九つとなつてゐる。高い方の木の枝には二羽の鳥がとまり、もう一羽は地上に立つ人間の放つた矢についた繳によつてからめ落されてゐる。郭德維はこの高い方の木を『山海經』海外東經に九日が下枝に居り、一日が上枝に居ると記される扶桑、『淮南子』墜形訓の前引の條の若木に當ててゐる。これが扶桑か若木か、或いはそれ以外の所傳に據るそれらとはまた別の木かは確かめられないが、十の太陽を花の形で附けた傳説的な木であることは疑ひない。この遺物の出土した曾侯乙墓は前五世紀後半頃のものと考へられる。漢代の資料に出てくるこの類の木が戰國に遡ることが知られる。

傳説的な木に花の形で附く太陽について、後漢の高誘が蓮の花の形の如くだといふが、圖18の圖像では圓から光芒の出た形に畫かれてゐる。この蓮の花即ち四葉紋形と圓から光芒の出た形、それとまた所謂内行花紋、旋回する光芒の出る圓は、いづれも戰國末から漢、六朝にかけての時代、等しく光り輝く天體を表はすのに使はれた象徴的な圖柄であつたと考へられるのである。以下にそれを示さう。

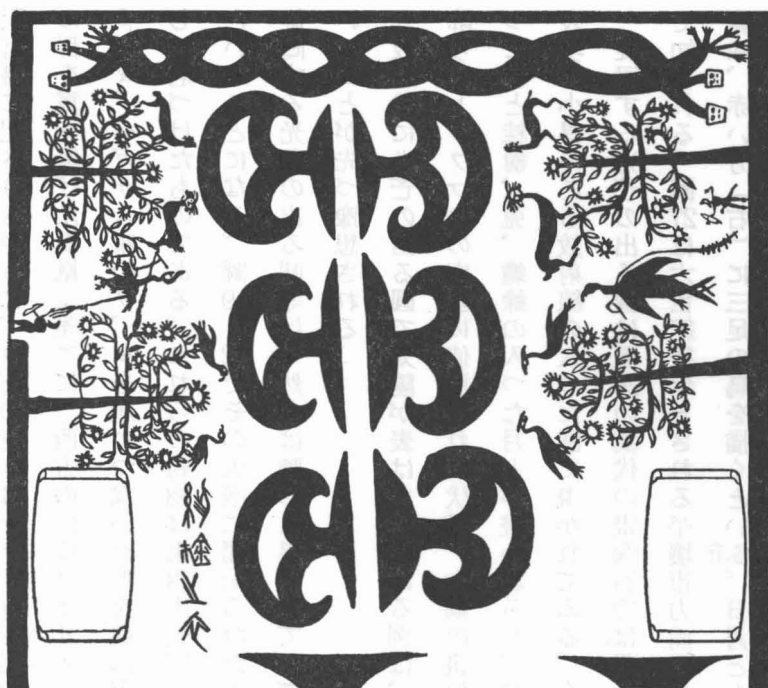


圖18 太陽の花をつけた木 漆器 戰國 隨州曾侯乙墓



圖20 所謂内行花紋で表はされた日月星辰 鏡 後漢 貴縣北郊 1/3

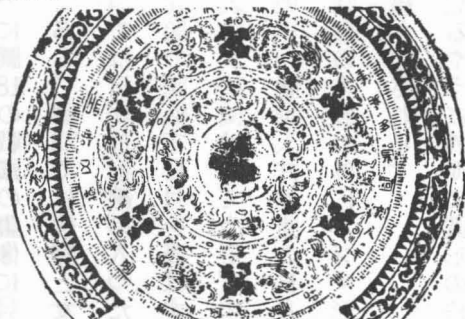


圖19 所謂四葉紋で表はされた日月星辰 鏡 後漢 貴縣北郊 1/3



圖22 旋回する光芒の出る圓で表はされた日月星辰 鏡 後漢



圖21 光芒の放射狀に出る圓で表はされた日月星辰 鏡 前漢 廣州登峰路游魚崗 1/3

圖19、22はいずれも獸帶鏡と呼ばれる類で、鈕座をめぐる環狀の主紋樣帶に四神、或いは四神とそれに隨伴する神話的な動物を配した圖柄によつて特徴づけられる。四神とは天の四方の星座を代表する星について想像された動物で、『史記』天官書に記されるやうに、東方の青龍はサソリ座を尾の巻き上つた龍に、南方の朱雀は海蛇座、コップ座の邊の小さい星の群を翼を擴げた鳳凰(雀)に、西方の白虎はオリオン座の目立つた星を上から見た虎に、玄武は小馬座の α 、水瓶座の β 、 α 、ペガサス座の θ 、 ϵ を順につないだ形を龜の甲に見たて、夫々に五行思想によつて各方角に配された色の名を冠して名づけたものである。これらの動物は東西南北四方の星座の像であり、その配された主紋の環狀のスペースは天空といふことになる。圖19、22でその天空に間配られた小ぶりの所謂四葉紋、所謂内行花紋、光芒の線の放射狀に出る圓、旋回する光芒の出る圓等は、然らば圖形は異なつてゐてもいづれもその天空をめぐる天體、日月星辰の類ではないか、といふことが先づ豫想される。

放射狀に光芒の出る圓で太陽が表はされてゐる例は、先に圖18の戰國の畫像に見た所である。圖23、25は遙かに時代が降り、トルファンの唐墓に使用された伏羲、女媧の畫像である。圖23では伏羲と女媧の間、頭の上と尾の間に三足鳥の入つた日と桂樹、兎、蟾蜍の入つた月とが畫かれるが、圖24では日が放射線の入つた圓、月が三日月に表はされ、圖25では表現に小異のある放射線の入つた圓に畫かれてゐる。今問題の圖柄で日月を表はす傳統の存續が證される。

旋回する光芒の出る圓は圖26の漢代の畫像石では月を表はすに使はれてゐる。中央に蟾蜍の入られてゐることによつて知られる。圖27は六世紀後半とされる平壤市力浦區眞坡里一號墳天井壁畫の日月である。白い方(左)に藥を搗く兎と蟾蜍、赤い方(右)に三足の鳥を描くといふ¹⁷⁾。日月とも圓形の本體の外にコマ形とS字形を交互にした旋回する光芒の一種を加へてゐる。この形で日月の像を表はす傳統の存續が證される。

次に圖2の鏡に見る所謂内行花紋。この名稱はここに見るやうに外側に圓形の枠のある形について命名されたものであ



圖25 伏犧女媧圖に伴ふ放射線の入った圓の日月 絹畫
唐 トルファン, アスターナ

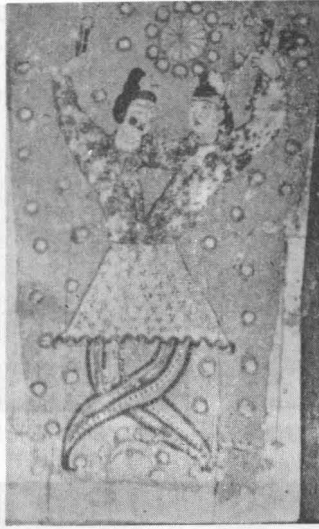


圖24 伏犧女媧圖に伴ふ放射線の入った圓の日月 絹畫
唐 トルファン, アスターナ



圖23 伏犧女媧圖に伴ふ日月 絹畫
唐 トルファン, アスターナ

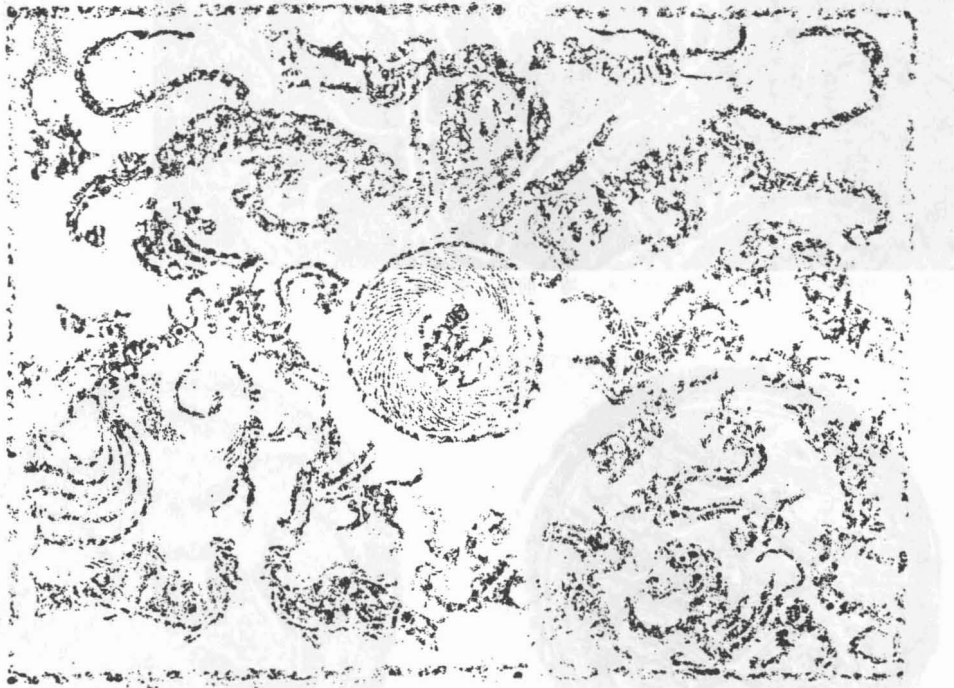


圖26 旋回する光芒の出る圓で表はされた月 畫像石 後漢 鄒縣金斗山



圖28 太鼓につけられた所謂内行花紋 畫像磚 後漢 四川省

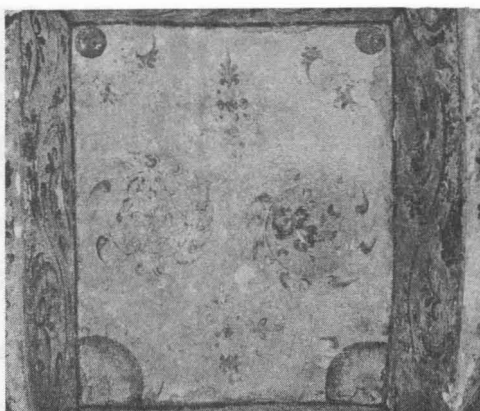


圖27 旋回する光芒の出る圓で表はされた日月 6世紀後半 平壤眞坡里1號墓



圖30 所謂内行花紋形の花のつく木 磚 前漢 東京國立博物館



圖29 太鼓につけられた折線狀の光芒の出る圓 畫像石 後漢 沂南

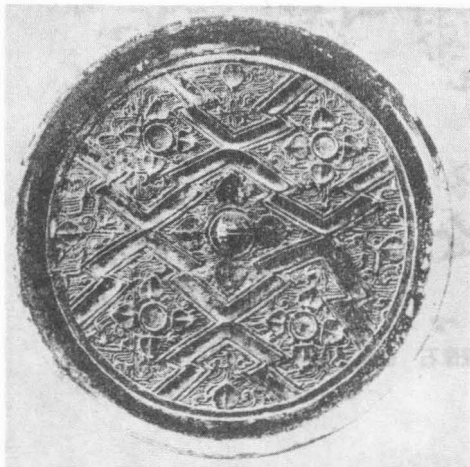


圖32 複合菱形紋中の所謂四葉紋 鏡 戰國



圖31 複合菱形紋中の所謂内行花紋 鏡 戰國

るが、適切とはいへない。この形は圖28の後漢畫像磚の太鼓の革に表はされてゐるやうに、本來圓形の枠なしに圓の外に孤線を連ねた形で尖つた光芒を描き加へたものである。圖29の後漢の畫像石の太鼓では同式の光芒が折り曲げた線でもつて表はされてゐる。圖29の方の形が光る物體を象することは先づ疑ひあるまい。この所謂鋸齒紋は圖19 20のごとく鏡紋の周邊部で密接した線で表はされた光芒と併用され、また圖22のやうに鏡紋の同じ部分で旋回する光芒とも併用されるが、これらは太陽の光を反射してまぶしく光る鏡が日月星辰の類の天體に見立てられてゐると解することができよう。圖28に用ゐられる、圓形の枠を缺いた圖形は、圖30の前漢後期の空埴のスタンプ紋の樹木の梢に花として使はれる例がある。この場合はただ一個だけであるが、先に引いた圖18や若木の太陽の花を思ひ起させる。圖31 32はいづれも戰國後期の粗い羽狀地紋の上に複合的な菱形を匙面の帶で表はす一類の鏡であるが、菱形の中に入れられる圖柄は圖31では今問題の形の光芒のついた圓であるが、圖32ではそれが四葉形に代つてゐる。両者が互ひに他に代りうる共通の意味を荷つた圖形であつたことによるものと考へられる。

以上により、四葉形＝蓮の花、所謂内行花紋＝正確には弧線を連ねた形で尖つた光芒を描き加へた圓、鋸齒紋風に幾何學的な形で尖つた光芒を加へた圓、放射線の形で光芒を加へた圓、旋回する光芒の線を加へた圓が、いづれも光り輝く日月星辰の類を表はすに使はれたことが明かになつたと考へる。

この類の圖像は由來の古いものである。幾何學的な形で尖つた光芒を加へた圓、即ち星形は、圖33の鄭州大河村の仰韶文化第三期の土器に現れる。圖35は安陽殷墟の殷後期の土器片に刻された例である。圖36は鄭州二里岡の戰國墓の陶製明器に描かれたもの。圖37は洛陽中州路東周遺蹟發見の陶製の釘の頭の紋様である。圓に放射狀の線を加へた圖柄としては例へば圖34の鄭州大河村仰韶文化第三期の陶片がある。また前引圖35の安陽殷墟の陶片の前引圖柄の右上にあり、また前引圖37の上圖の中心部にもこの圖柄がある。旋回する光芒の類としては圖38のごとき、大汶口文化の玉器がその類と見ら

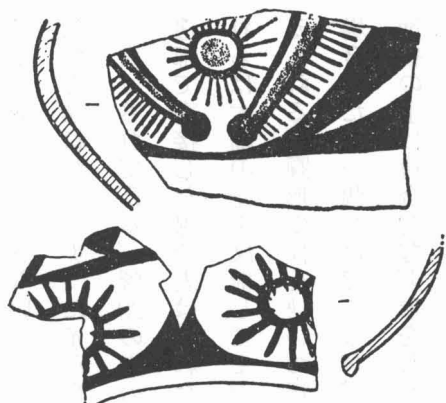


圖34 仰韶文化の放射線の出る圓 土器 鄭州大河村



圖33 仰韶文化の星形 土器 鄭州大河村

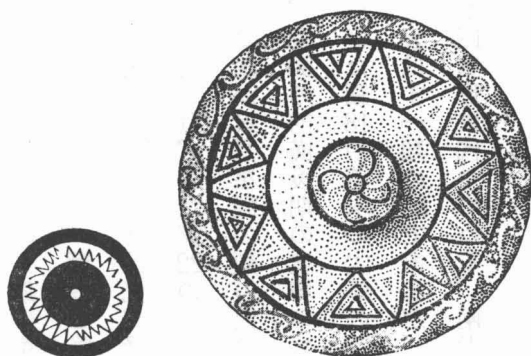


圖36 戰國時代の星形 陶豆蓋 鄭州二里岡

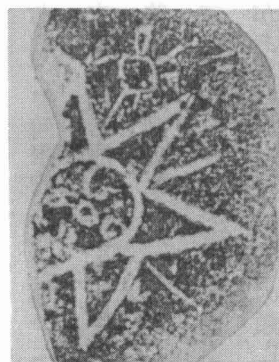


圖35 殷後期の放射線の出る圓と星形 土器 安陽殷墟

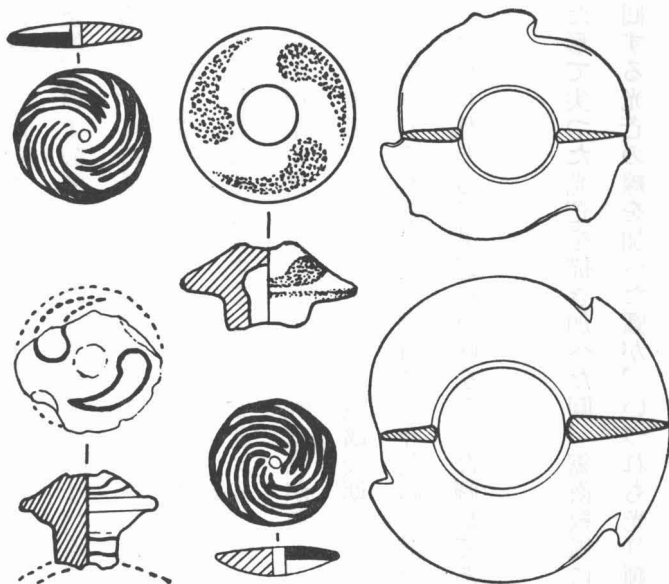


圖39 屈家嶺文化(左上, 右下)と岳石文化(左下, 右上)の旋回する光芒 紡錘車, 土器の蓋

圖38 旋回する光芒形の玉器 大汶口文化 膠縣三里河

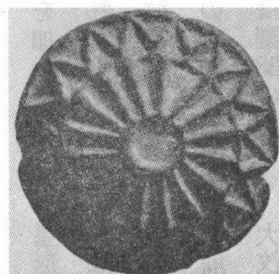


圖37 戰國時代の星形 陶釘 戰國 洛陽中州路

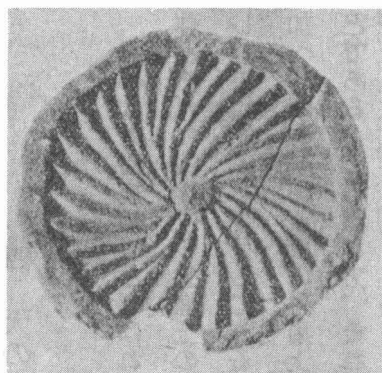


圖40 旋回する光芒 瓦當 東周 鳳翔
南古城村

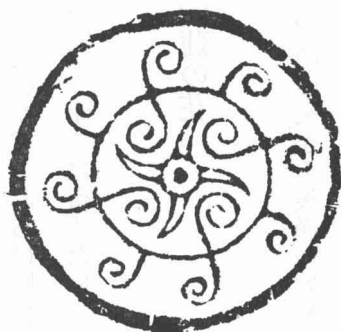


圖41 旋回する光芒 瓦當 秦 咸陽1號宮址



圖42 旋回する光芒 瓦當 秦 咸陽密店



れる。この形は殷—西周時代にも璫璣と誤つて呼ばれる類に傳統のつづくもので、筆者が甲骨文、金文囧字との同定によつて囧紋と呼んだ類（圖35の星形の中心の圓内の圖柄）もその線紋化されたヴァリエーションである。¹⁹ 筆者が囧紋としたこの旋回する光芒の圖柄が屈家嶺文化の陶製鈐錘車の彩紋、岳石文化の陶製容器の蓋のつまみの彩紋（圖39）に見出されることは劉敦愿の指摘する所である。²⁰ 圖36右圖の鄭州二里岡戰國墓の豆の蓋の彩紋は、星形の中心に旋回する光芒を加へた圓を入れてゐる。途中をつなぐ資料は今の所知られないが、これが圖35の囧紋を入れた星形と無關係とは考へられない。

旋回する光芒のモチーフは單獨で（圖40左）、或いは四葉紋、囧紋と組合はされて（圖42）、或いは中心にもう一つ旋回する光芒をもチーフを附け加へて（圖41左）、秦の瓦當において様々なヴァリエーションを展開してゐる。

以上を引いた時代の廻る例は、同時代において夫々特有の象徴的意味を

持つてゐたであらうことは想像に難くないが、これらは時代も飛び飛びであり、それについて考察を別へるには資料があまりにも不十分である。資料の存在を紹介するに留めたい。

四 天の中心の蓮の花

圖43は方格規矩鏡と呼ばれる鏡で、前漢末から後漢の始めに多數作られた型式のものである。銘文のある圈の内側に四神とそれに随伴する想像上の動物を四方に配し、その間に小さい内行花紋をはめ込む點は、前節で引いた獸帶鏡と共通し、時代的にも平行してゐる。異なる點は四神の内側の圈が方形をなすこと、またその方形の各邊の中央にT字形を附け加へ、四神のある圈の外周上、T字形に對應する位置にL字形、中心の方形の角に對應する位置にV字形を入れてゐることである。この圓と方、それに加へられるT、L、Vの形の象徴的意味については先に筆者の考へを詳しく述べたことがあるので、ここには繰返さない。ここでは中央の方形が地、その外側の圓形の圖が四神の形で表はされた四方の星座のかる蓋狀フタガサの天を表はすことだけを想起しておかう。

以前にこの式の鏡を論じた際に觸れなかつたのは、中央の四葉形——圖43では八葉形をとる——のことである。この形が同時代に蓮の花と考えられてゐたことは第一節に記した通りである。然らばこの鏡紋は同形の天に對する方形の地の中心に蓮の花がある、といふことになる。ここに表現されてゐるのは確かにさうではある。然し中國世界の大地の眞中に蓮の花があるといふ形の所傳に知られない。然らばこの蓮の花は第三節で記した、天體を象徵するもので、鏡の中心にあるのは蓋狀の天の中心にあるものがこの位置に投影された形で表はされてゐるのだ、と解せざるをえないことになる。先に獸帶鏡について述べたやうに鏡紋の一番外側の雲氣クモキ、その内側の鋸齒紋と放射線紋、四神の配されてゐる空間が夫々意味



圖43 方格規矩鏡 後漢 天理參考館

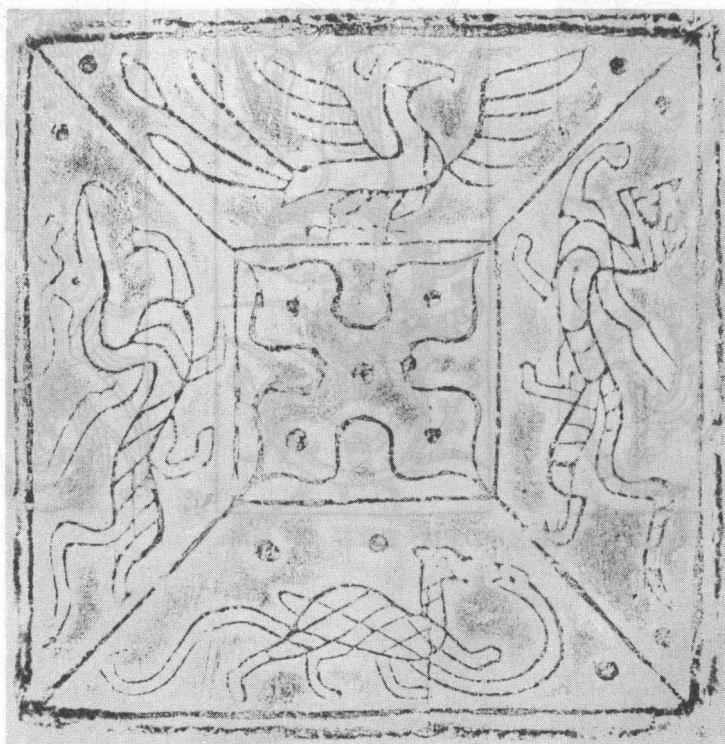


圖44 中央及び四方の星座の象徴 漢 埤

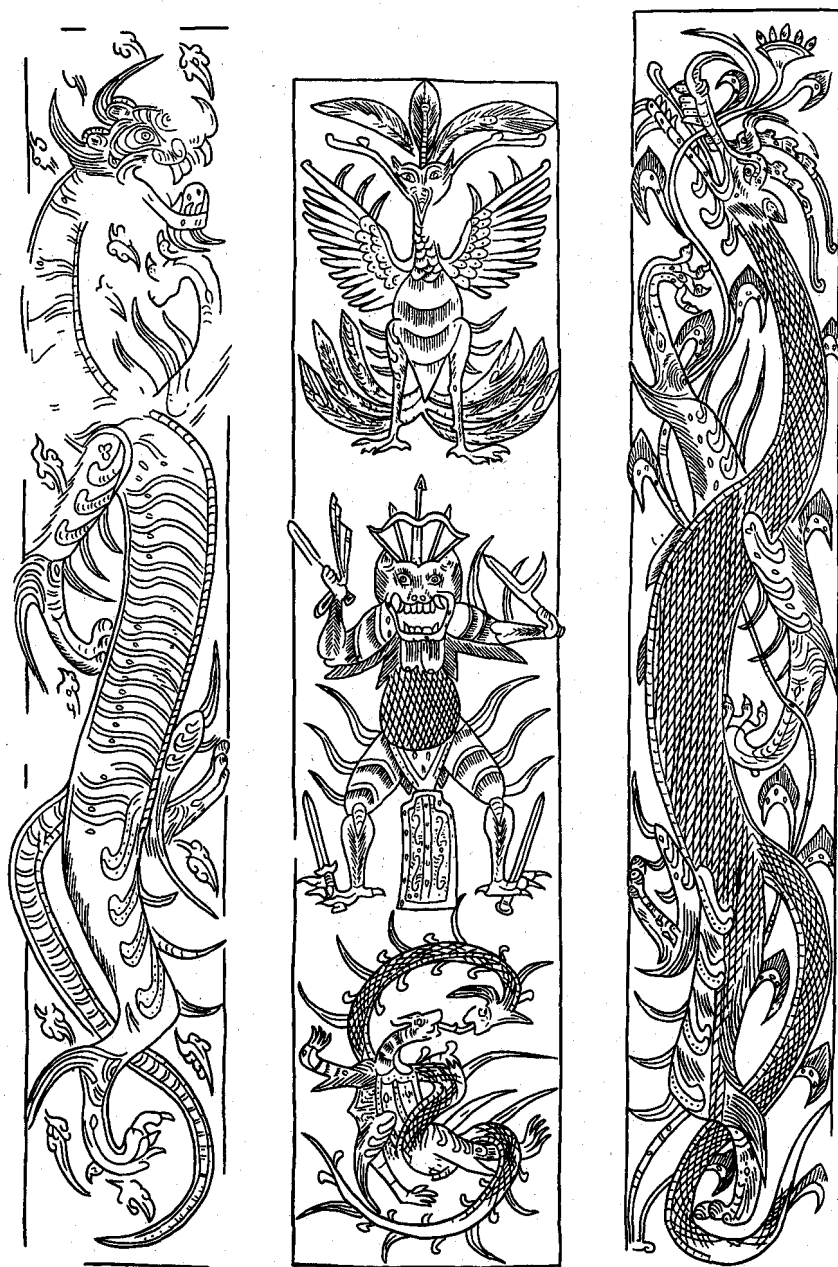


圖45 天帝使者と四方の星座の象徴 画像石 漢 沂南

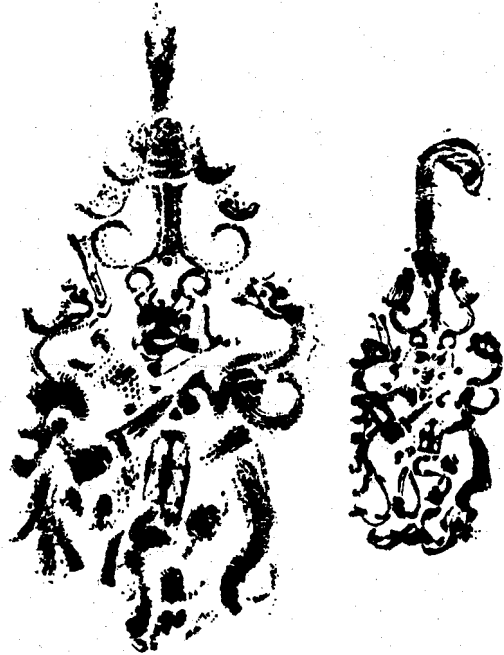


圖46 天帝使者と四方の星座の象徴 帶鉤 漢

を持つてをり、また注(19)所引に記したやうにそれに加へられたT、L、Vの形、中央の方形、十二支の文字等も意味のあるものであり、この鏡の圖柄の他の總ての要素が意味を持つたものであることになると、この中心の蓮の花の圖柄のみがただ習慣的に器物の中心に配される無意味な圖案である、と片附けることが許されないからである。

この蓮の花が蓋天の中心に位置を占める天體となると、具體的には何か。『史記』天官書で「東宮は蒼龍……」「南宮は朱雀……」と四神によつて代表される天の四方の星座の記述のある部分の最初を見ると

中宮、天極星、其一明者、太一常居、旁三星、三公、或曰子屬

と、即ち中宮は天極星なり、その一の明るきものは太一の常居なり。旁の三星は三公なり。或いは子屬といふ、と出てくる。圖43のやうな方格規矩四神鏡で、四神の配された蓋狀の天の中心に来るのは、當然中宮の星座を代表する天極星、即ち今月の小熊座の γ 、 β 、5、4等一列に並んだ星の星座である。この星座は今月恒星運行の中心である北極と少し離れた位置にあるが、北極の位置は地球の自轉の首振り運動によつてずれて來てゐる。漢頃にはそれは小熊座の一列に並んだ目立つ四つの星の北への延長線上にあつた。⁽²⁴⁾『爾雅』釋天に「北極はこれを北辰といふ」とあり、郭璞の注に「北極は天の中なり、もつて四時を正す」といふのはこの北極の星座、恒星の運行の中心の周圍を時の針のやうに廻つてゐたことを言ふものである。

さて鏡紋では天極、即ち天の棟木の圖像は表はされず、光り輝く天體を象徵する蓮の花一個が表はされてゐる、とする
と、中宮の天極は、その中の一つの星で代表されてゐる——といふと當然一番明い星、小熊座の β 、太一の常居とされる
星で代表されてゐると解さねばならない。

太一とは何か。『史記』封禪書に亳人謬忌が太一を祠る法を奏した語を引き

天神貴者太一、太一佐曰五帝

と、即ち天神の貴いものが太一で、太一の補佐を五帝といふ、と。前漢の頃、太一は天神の中で一番貴い神だと考へられてゐたのである。『史記』天官書の前引の天極星の條の『正義』に泰一は天帝の別名なり、といふ。封禪書前引の條に五帝を補佐するといふから、太一は最高位の帝といふことは當然考へられよう。

以上、圖43のやうな方格規矩四神鏡の中央を占める四葉形、即ち蓮の花について、この種の鏡とはほぼ同時代の資料を用してその素性を明かにすることができたと考へる。それは四神によつて代表される天の四方の星座の中央にあり、天の中央の星座群を代表する天極星の中の中心的な星を表はし、そこに位する太一の神を象徵するものであつた。この天極星の神である太一は文字通り宇宙の運行の中樞に居り、最高位の天神、天帝であつたのである。この方格規矩四神鏡の圖柄では地を表はす方形とか鏡の鈕、T、L、V字の圖形等が加はつてをり、東南西北の四方の星座を表はす四神と中央の星座を代表する天極星の象徴との關係が見えにくい、が、圖44の²⁶墳には、他の要素なしに中央及び四方の星座の象徴だけが表はされてをり、極めてわかり易い。

圖45は沂南畫像石墓前室北壁、即ち前室から中室に通ずる通路の中央の柱及び左右の壁の正面に彫られた畫像である。左右の壁に白虎と青龍、中央の柱の上と下に朱雀と玄武が刻され、中央には四肢や頭上、足間に各種の武器を持った畏獸形の鬼神がある。この像について筆者は以前、同じ圖柄の帶鉤（圖46）で裏に「天帝使者」の文字の入つたものを引き、

これを天帝使者と考へた。方格規矩四神鏡において四神に圍まれた蓮の花で象徵された天極星の神Ⅱ太一の配された位置に、代りに天帝使者が入つてゐるわけである。天帝そのものでなく、天帝の使者の像が使はれてゐるのについては、後漢時代に墓中に入れられた瓶に記された呪術的な文を引き、地下の世界の支配者の被葬者に對して及ぼしかねない禍殃を天帝使者がとり除いてくれることを期待してのことであつたと解釋した。それは兎も角、圖45 46で四方を四神で圍まれた中央に天帝使者が配されてゐる事實は、圖44の塙や方格規矩四神鏡（圖43）で四神に圍まれた中央にある四葉紋Ⅱ蓮の花を天極星の神Ⅱ太一、天神の最も貴い者である天帝の象徵とした先の論證を裏づけるものと言ふことができる。

右に見た所によると、圖43のやうな方格規矩四神鏡の圖柄は四神と中央の蓮の花によつて象徴的に表現された天と、十支の文字を入れた方形によつて象られた中國の地上世界を表はしてゐるのである。この鏡紋の意圖する所は銘文に

左龍右虎辟不詳、朱雀玄武調陰陽、子孫備具居中央

と讀まれるやうに、天の四方の星座の精は悪い影響を却け、陰陽の創造的な働きを調和させ、鏡の所持者は子孫繁昌して世界の中央の國に榮える、といふ理想的な目出度い世を現出することなのである。然らばこの生者の住む目出度い世界の中央にある蓮の花と、靈光殿賦にうたはれるやうな王侯の住む宮殿の天井に飾られ、また死者の住ふ場所である沂南畫像石墓等の天井に刻まれた蓮の花とは、どのやうな關係にあつたであらうか。

先に引いたやうに靈光殿賦の天井に飾られた蓮の花について、晉の張載はもつて光輝となす、と注をつけてゐた。天の中央の星座群を代表する天極星の中の一、最も明るい星が蓮の花で象徵されてゐるのであるが、この星は天極星の星座の中では一番明いとはいへ、ただの二等星である。宮殿の天井に飾られて明く輝くといふやうなものではない。明いといへば何といつても太陽である。ここで思ひ起されるのは、この天極星の第二星が日を司るといふ所傳である。『晉書』天文志に天極星を

北極……第一星主月、太子也、第二星主日、帝王也、亦太一之坐、謂最赤明者、第三星主五星、庶子也

と、即ち北極『史記』天官書の天極星の星座)……その第一星は太子で、月に司る、第二星は日を司り、帝王である。また太一の座でもある。最も赤くて明いものをいふ。第三星は五星を司る。庶子である、といふ。第二星を帝王とし、他を太子と庶子とし、これらが日月と五つの惑星を司るといふ考へであるが、先に蓮の花で象徴されたと考へた小熊座のβの星は日を司るものとされてゐる。生きた人間の居室、死者の住ふ墓室の天井に大きく表はされてゐるのは、この太陽と結びついたものとしての天井の蓮の花と意識されたのではないかと考へられる。勿論それはただの日の光の象徴に留らず、不詳を却け、陰陽を調へる四方の天神の上位に在り、四時の運行の樞要の地位を占める太一の神、天帝の象徴として、その下にある世界(居室、墓室)に生産的な影響力を及ぼすものと考へられたに相違ない。

天井の中央に大きく蓮の花を飾る風は漢以後にも長く傳統が続いてゆく。圖47は永和一三年(三五七)銘のある朝鮮人民民主主義共和國黃海道安岳の三號墓(冬壽墓)の玄室藻井中央に畫かれた蓮の花である。圖48は四世紀末から五世紀中頃のものと考證されてゐる酒泉嘉峪關丁五號墓の例。前室の伏斗形の天井中央に畫かれ、その東西の壁には夫々日と東王公、月と西王母、南北の壁には夫々白鹿と天馬といった祥瑞の像が畫かれ、宇宙の中央が大きな蓮の花といふ漢代の傳統の連續が認められる。

北魏から唐の佛教石窟の天井には極めて變化に富んだ圖案の蓮の花が飾られる。一々圖を引くにも及ぶまい。敦煌二八五號西魏窟の伏斗形の天井の南北に寶珠等佛教的なモチーフが用いられながら、それと共に雷神等の中國の傳統的な天神を畏獸の姿で畫き、中央に天蓋を象つてその中央に蓮の花が配されてゐるやうな例は、圖48のごとき中國で漢代から續いて來た天井裝飾の傳統を襲ふものである。

張家口宣化區で發見された遼天慶六年(一一一六年)に死亡した張世卿の墓の後室天井に畫かれた星の畫(圖49)は中

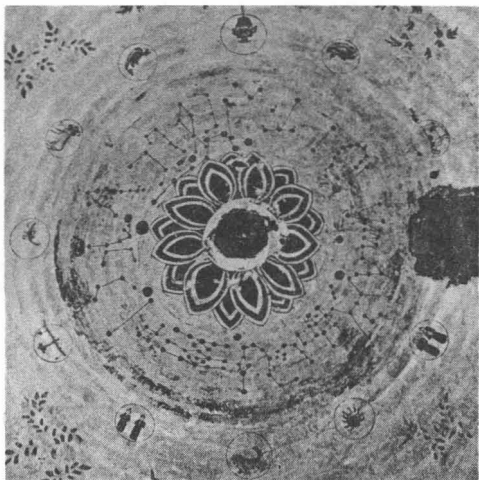


圖49 墓室天井の星座，黃道十二宮圖と蓮の花
張家口宣化區 遼

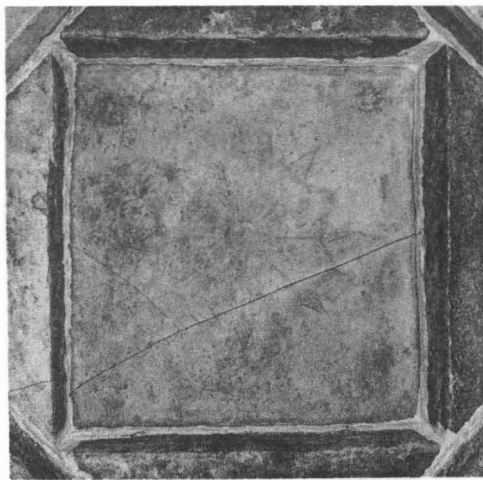


圖47 墓室天井の蓮の花 安岳3號墓 永和13
年(357)

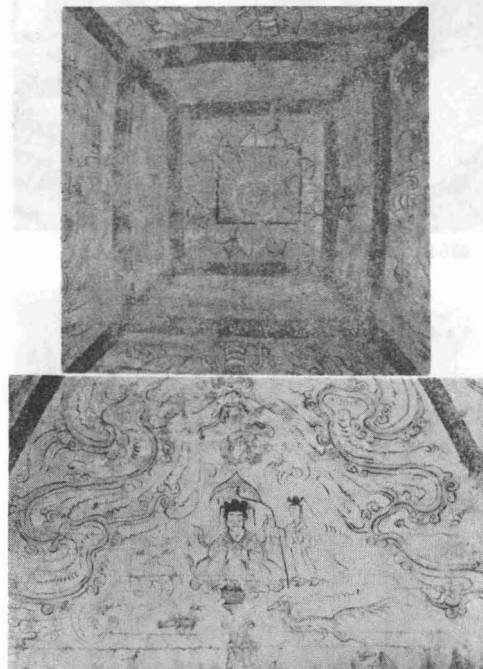


圖48 墓室天井の蓮の花 酒泉嘉峪關 J 5號墓
4世紀末～5世紀中頃

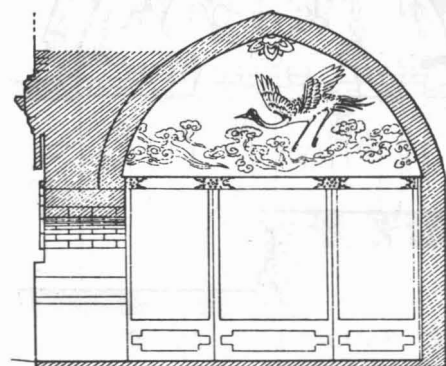


圖50 墓室天井の蓮の花 焦作市老萬莊 金

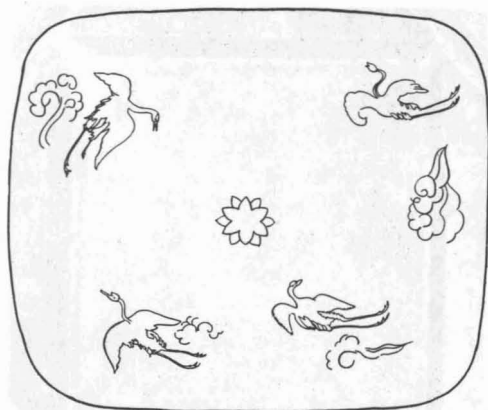


圖53 墓室天井の蓮の花 井陘柿莊 金

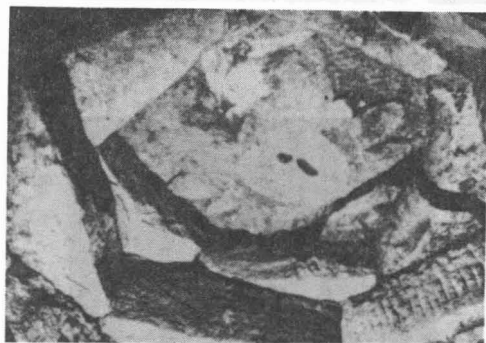


圖54 墓室天井の蓮の花 凌源富家也 元

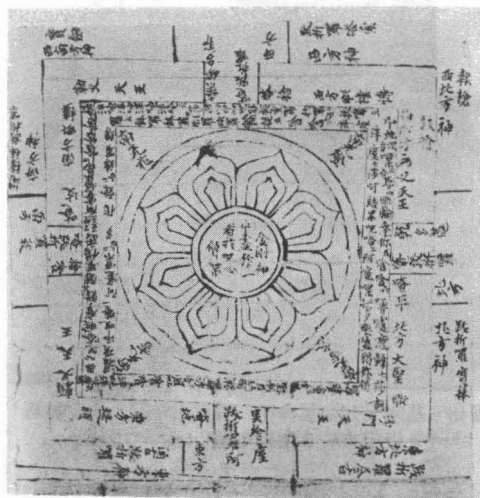


圖55 隨求尊位曼荼羅 敦煌 唐 By
Permission of the British Library

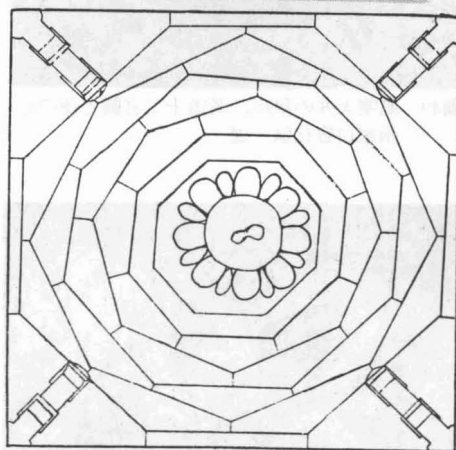
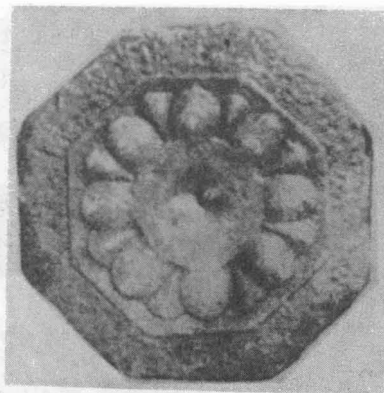


圖51 塔基石室天井の蓮の花 鄭州開元寺址
北宋

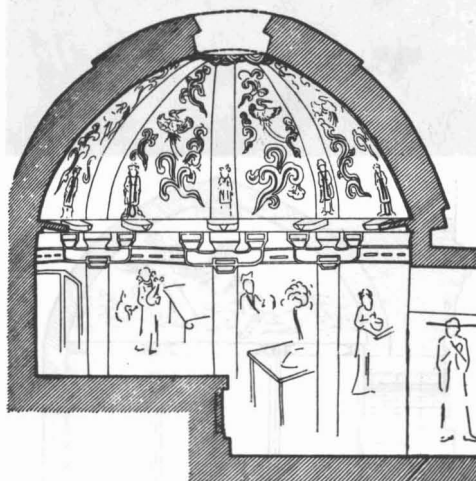


圖52 墓室天井の蓮の花 北京八寶山 遼

國における黄道十二宮の最古の圖のあることでよく知られるが、この墓室の天井中央には大きく蓮の花が畫かれ、その中央に鏡が嵌められてゐたといふ³⁴。十二宮と蓮の花の間には二十八宿が畫かれる。恒星の畫かれた蓋狀の天と中央の蓮の花のテーマは漢以來の傳統である。蓮の花の中央に鏡が嵌められてゐるのは、太陽を司るとされる小熊座 β 星の天帝を象徴する光り輝く花としての蓮の花の働きを、鏡の使用によつて強力に表現しようといふ意圖したものに相違ない。墓室等の天井の中央に大きく蓮の花を飾り、またその中央に鏡を嵌める例は他にも少くない。圖を引くに留め（圖50、54）、一々説明は加へない。

なほカンマンはラマ教の曼陀羅の圖式と方格規矩四神鏡鏡背紋の圖式との類似に注意し、その古い形、圖55のやうな圖式が後者から出自したであらうとしてゐる³⁵。氏はラマ教にとつて曼陀羅の中心の圓（蓮の花が畫かれる³⁶）は宇宙の中心とされてゐたばかりでなく、更に特殊的には創造の焦點である形而上的な太陽と考へられてゐたとし、方格規矩四神鏡の中央の無地の鈕が同様な意味を内包するものであると考へてゐる³⁷。この節で明かにしたやうな方格規矩四神鏡の中央の四葉形の意味する所について、カンマンが全く知る所のなかつたことが惜しまれる。

五 華蓋星と天皇大帝

帝と關係した天上の蓮の花といふと、また天皇大帝と華蓋がある。後漢から三國にかけての鏡紋にその圖像があり、以前にとり上げて解説を行つたことがある³⁸。その後知つた知見も加へてあらましを紹介する。天皇大帝、華蓋の星は『史記』天官書には出て來ない。華蓋は後漢の張衡（七八—一三九）の西京賦に「華蓋承辰」と出て來るのが年代のわかる資料としては古い。それについて三國の吳の薛綜の注に

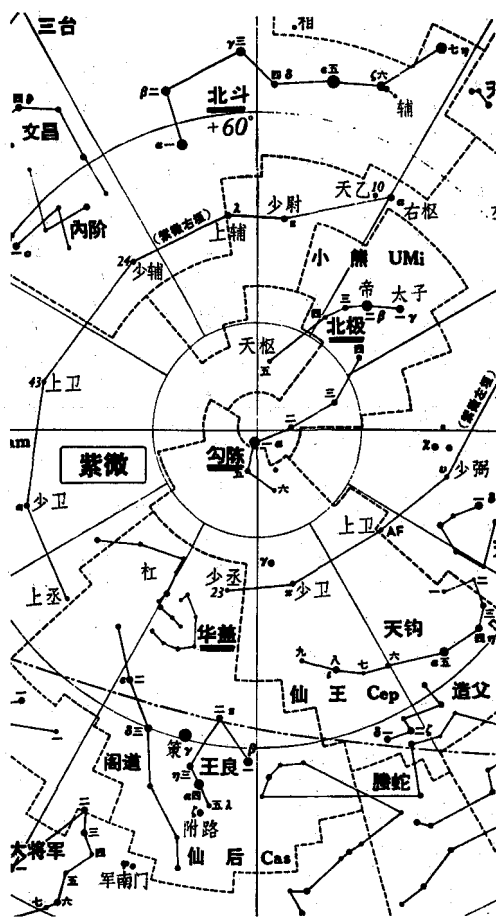


圖56 北極附近の星座

『史記』天官書に天極と呼んでゐる星座に當てる方が距離的に近からう。その中の β 星は天帝の座とされる。華蓋がこの帝にさしかけられるものだとする考へが三國時代にあつたことになる。

『晉書』天文志には別に華蓋が天皇帝の座にさしかけられるといふ考へが記される。

北極五星、鉤陳六星、皆在紫宮中……鉤陳、後宮也、大帝之正妃也、大帝之常居也……鉤陳口中一星曰天皇大帝、其神曰耀魄寶、主御羣靈、執萬神圖……大帝上九星曰華蓋、所覆蔽大帝之坐也、蓋下九星曰杠、蓋之柄也

と、即ち北極の五星と鉤陳の六星はみな紫宮の中にある……鉤陳は天皇大帝の正妃で、その常の居所である……鉤陳の口の中の一星を天皇大帝といひ、その神を耀魄寶といふ。群靈を統御することを主り、萬神圖を保持してゐる……天皇大帝の上の九星（七星が正しい）を華蓋といふ。天皇大帝の玉座を上からおほふものである。華蓋の下に九星を杠といふ。華蓋の柄である、といふのである。華蓋のかさの方については顔師古が『急就篇』の注に

華蓋星覆北斗、王者法而作之

と、即ち、華蓋星は北斗にさしかけられてゐる。王者はこれに法つて華蓋といふものを作つた、といふ。辰を北斗と釋してゐるが、傳統的に華蓋にされる星座はカシオペイア座のW字形の北極寄りの星に當てられ、北斗七星とは遙かに遠い（圖56）。本文の辰は『爾雅』釋天に「北極はこれを北辰といふ」とある北辰、即ち小熊座の α 、 β 等、

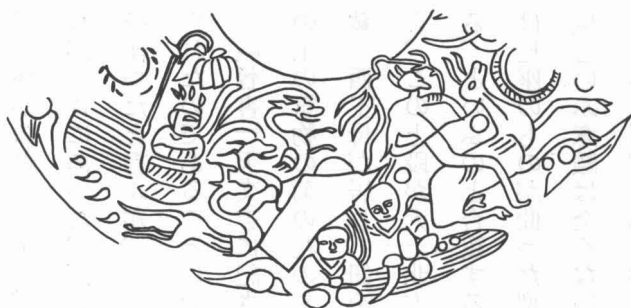


圖57 華蓋のある雲車 鏡 岡山縣苫田郡鏡野町觀音山古墳
三世紀 上2/3



圖58 華蓋と天皇大帝 鏡 後漢

一曰、翳者謂華蓋也、今之雉尾扇是其遺象
と、即ち、一に曰く、翳は蓋華をいふなり。今の雉尾の扇はその遺象なり、といふ。雉の尾羽根で作った扇に似た蓋だといふのである。華蓋といふから、美しい鳥の羽根を花びらに見たてた花の形の蓋と考へられる。ただ華といふだけで蓮の花を指した例は前節で引いたが、恐らくこれも蓮の花を象つたと考へられる。かさの部分が星座の華蓋のやうな形態のものは圖57の鏡紋中にある。前三世紀前半頃の鏡である。下方の缺失部分の左に見えるのがそれである。三頭の龍の引く雲

車に何かの神が坐乗し、その上に蓋がさしかけられるが、花瓣の先が少し外反した蓮の花を伏せた形に作られてゐる。これが現實にあつた、蓮の花を象つたといふ蓋、華蓋に相違ない。⁴⁰ 薛綜は前引の西京賦の注に星座の華蓋をみて王者がそれを作つたと言ふが、それは勿論逆で、貴人用の華蓋といふものがあつたから、天上の星をつないで華蓋といふ星座が想定されたのであることはいふまでもない。

『晉書』天文志に記される華蓋、天皇帝について以前に筆者は圖58のごとき三段式神仙鏡の最上部中央にある柱とその上の管物の菊の花のやうなものをこの華蓋に當て、その下右方の坐像を天皇帝に當てた。この鏡紋の中段左には勝を戴く西王母が居り、鈕を隔ててこれと相對するのは東王公と考へられ、上段中央には蛇の絡んだ龜、即ち玄武がある所から、この上段が天上北方の世界を書くものと知られ、その界限について『晉書』天文志に華蓋が天皇帝にさしかけられる、といふのと合致するからである。もつとも星座の華蓋の蓋は星座のものが深いのに對して鏡紋のものは淺く廣い、杠は星座のものが曲つた型式のものであるのにこの鏡紋では眞直で玄武の上に立つてゐる、等、鏡背の圖柄に天の星座の寫生といふ意識は全くないといふ大きな違ひがある。然し同じ鏡紋の中の西王母東王公の圖像が全くの想像の畫であることを考へれば、北極の神の圖像がさうであつて不可ないといふことは全くないと考へる。

圖58のごとき三段式神仙鏡は大體前三世紀前半頃とされるが、この時代に華蓋のさしかけられた天皇帝の圖柄が行はれたわけである。前節で見たやうに、前漢末から後漢初には四神によつて象徵された東南西北四方の星座と、圖案化された蓮の花である四葉紋によつて表はされた中央の星座の圖柄を持つた方格規矩四神鏡が流行し、『史記』天官書の中央及び四方の星座群の記載に對應してゐる。一方『史記』天官書には天皇帝や華蓋の記載が見えない。三世紀になると鏡紋にこのテーマが現れ、『晉書』天文志にも小熊座の α 、 β 等の五つの星から成る北極と並んで小熊座の九星を中心とする鉤陳と天皇帝、華蓋の記載が出てくるのである。いつ時分に始まるものかは知られないが、前漢には顯れなかつた天皇帝

帝と華蓋の星座が顯著な存在となつて來てゐることは確かである。天皇大帝の上に華蓋といふ星座が設定されるについては、前漢末から後漢初にクローズ・アップされて來た天の中央の星座天極星を代表する子熊座の β 星 \parallel 太一の座 \parallel 天帝を象徴した蓮の花、の存在が係つてゐたことは疑ひあるまい。前節に引いた敦煌の佛教石窟の天井中央の蓮の花の圖案は天蓋を象つた畫像の中央に畫かれている。時代が降ると共に子熊座の β 星 \parallel 天帝の象徴である蓮の花と、子熊座の α 星（今日の北極星）にさしかけられる華蓋星の蓮の花との混同乃至同一化が進んでゐたことを想像せしめる事例である。

六 天帝と日月

圖59は濟南市大觀園畫像石墓の前室藻井の天井石の畫像である。^(註)中央に八瓣の蓮の花が彫られること圖3と同様である。

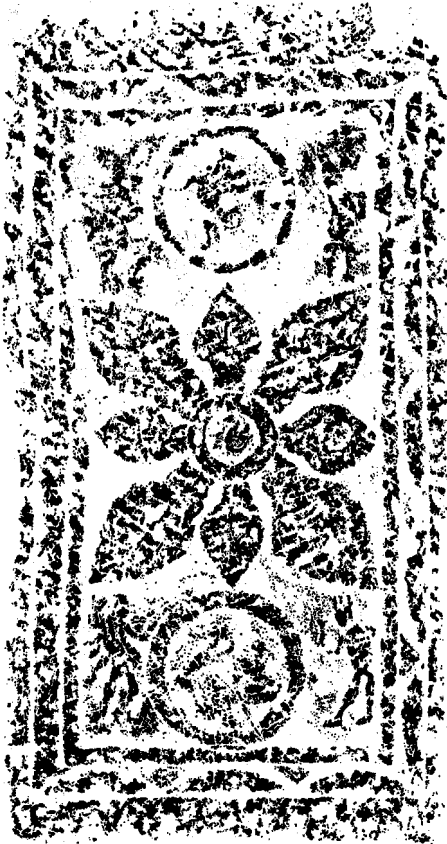


圖59 蓮の花と日月 畫像石 濟南市大觀園
後漢

その上下の圓形の圖は拓本で十分明かでないが、「上と下とに各々一つの圓輪があり、一は蟾蜍を刻し、一は金鳥を刻し、圓輪の外には仙人がある」と記述される。拓本で上の圖の中には確かに頭を左上に向けた蟾蜍を辨別することができる。日月と並んで刻されているのだから、この天井の蓮の花もただの蓮の花ではなく、第四節で明かにした天の中心である天極星を象徴するものとしての蓮の花に

違ひない。

さて、鏡銘中に「天王日月」の句がある。例へば中平（一八四—九）□年銘の四獸鏡の圖柄中、獸と獸の間に四字づつ

吾作明鏡、幽涑三羊、天王日月、位至三公

とある。天王日月の句はまた顯著なものとして、六朝に降る半圓方格帶神獸鏡の方格中に繰返し入れるものがあり。この句は吉祥の意圖を持つものと考へられるが、これはどういふことでさうなのか。まづ天王とは天帝のことである。『史記』天官書にサソリ座の星について

東宮蒼龍、房心、心爲明堂、大星天王、前後星子屬

とあり、また『晉書』天文志にも

心三星天王正位也、中星曰明堂、天子位、爲大辰

といふがこの天王を『春秋緯文耀鉤』及び『石氏星經』天官の注（『周禮』大司樂疏所引）に

房心爲天帝明堂、布政之所出

と「天帝」と言つてゐる。外に『莊子』外篇、天道に

昔者舜問於堯曰、天王之用心何如、堯曰……此吾所以用心也

といふ。天王は堯のことであるが堯は古への聖帝である。また『論衡』自然篇に

周公曰「上帝引佚」、上帝謂舜、禹也

とあり、古への聖帝が上帝と言はれてゐる。

以上によつて天王は天帝の意であることが知られた。すると「天王日月」は「天帝と日月」の意味となる。ここで思ひ起されるのは先の圖59の天井の蓮の花と日月の畫像石である。この圖柄は蓮の花で表はされた天帝と日月である。このや

うな天帝と日月の畫像を文字で記したのが鏡の銘文の「天王日月」である。「天王日月」即ち「天帝と日月」がどのやうにして目出度いのか。それは文字の方を見てゐては理解し難いが、それに對應する圖像の方を見れば別に難かしいことではない。それは天の中心にある天極、天帝の居をめぐつて日月が順調に運行し、四季が正常に廻つて來て農業生産が促進される、といった願はしい状態が、この圖によつて暗示されてゐるからに他ならないからだと考へられる。中宮の四方、東南西北の宮を代表する四神について鏡銘に「左龍、右虎は不祥を避け、朱鳥、玄武は陰陽を調ふ」といった句のあることは先に二五頁に引いた通りである。中宮天極を代表する蓮の花についてもそれら四神の機能を綜合した働きが期待されてゐたことは疑ひない。天帝の力を期待しようといふ場合、大がかりにやるのなら圖59のやうに居室の天井に「天王日月」の圖像を表はしたらよいし、もつと手軽にといふのであれば、「天王日月」の文句を誦へれば足りる、といふわけである。

圖59のやうに宇宙の調和をそこに現出させる意圖をもつて墓室の天井に天帝と蓮の花が日月と一緒に畫かれてゐるのを見ると、圖3のやうに墓室の同じ位置に日月なしに、單獨に畫かれた蓮の花についても、それが同様な意味合ひを全く持たなかつたと考へることは困難とならう。どの程度バツと華やかな蓮の花が意圖され、またどの程度天帝を思ひ起させるものと意識されたかについては、今の所推し測る術がないのであるが。

以上に見たのは「天王日月」即ち天帝と日月のテーマであるが、圖59に見るやうな最高神とそれを挟んで表はされる日月、といふ表現型式は、漢から六朝時代に行はれた圖像表現に普遍的なものであつた。圖60のよく知られる長沙馬王堆一號墓の帛畫の最上部、天國の門の更に上方の中央に女媧の像があり、その左右に日月が畫かれるのはこの型である。遙か時代が降る唐代の伏羲、女媧像（圖23、25）も日月と共に畫かれてゐるが、ここでは兩者の左右でなく、上下からこれを挟む。圖61の新繁清白郷畫像塼墓西室北壁で象族を隨伴する西王母像の畫像塼が、日と月を胸に著けた人頭鳥身神の塼に

挟まれてゐるのも同じ型である。

同じ型は佛像や道教像にも出てくる。圖62は正光二年（五二一）銘の碑像で、佛の倚像の彫られた龕の右と左に夫々鳥と蟾蜍の入れられた圓盤が彫られる。圖63は北魏の三尊佛坐像の光背上部である。中央に交脚の彌勒菩薩が彫られ、その上方中央に大きな神話的な樹があつて、その左右の枝の下に圓盤があり、夫々三足の鳥、蟾蜍が刻まれてゐる。これも同じ型に入る。また圖64の太和二三年（四九六）銘の碑像は龕の中の像は拓本がなく、銘に「立石像一軀」とあるだけで何の像か明かでないが、蓮華を入れた圓盤が左右に彫られてゐる。これも日月と見られよう。圖65の北魏石彫佛像では、頭

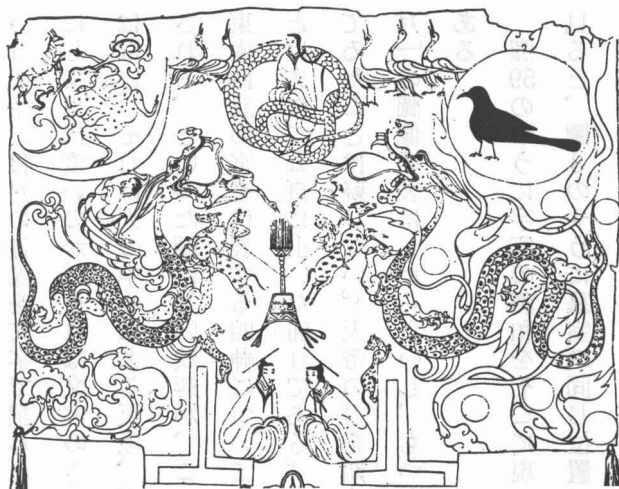


圖60 女媧と日月 帛畫 長沙馬王堆1號墓 前漢



圖61 西王母と日月神 畫像磚 新繁清白鄉 後漢



圖62 佛像と日月 碑像 耀縣 北魏



圖65 佛像と日月 石佛 北魏

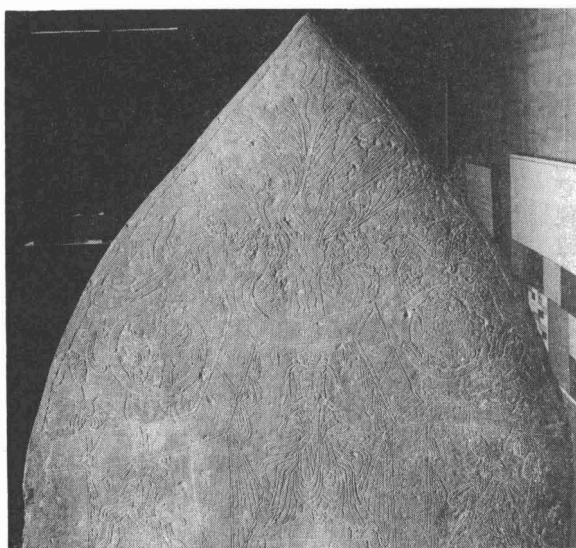


圖63 弥勒菩薩と日月 三尊石佛光背 北魏 大阪市立美術館



圖66 道像と日月 石像 北魏

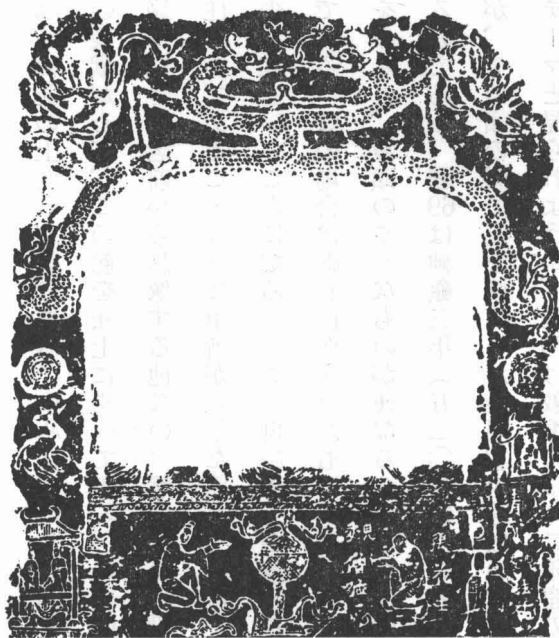


圖64 佛像と日月 碑像 耀縣 北魏

の左右上方に放射線を入れた圓盤が表はされてゐる。日月等をこのやうに圓によつて表現することは第三節に引いた所である。圖66は様式から北魏と知られる石彫道教像である。ここでは肩の左右に旋廻狀の線を入れた圓が彫られてゐる。向つて左のものは中心に蓮の花が入つてゐる。これらも日月と見られ、同じ型に屬する。

以上ざつと見た所により、圖59のやうな蓮の花によつて象徵された天帝とそれを挟む日月の圖像に見られる「天王日月」の型式が、漢以降新たに興つた中國の佛教や道教の圖像に採り入れられ、存續して行つたことが知られたと考へる。

七 蓮の花と天帝と龍

圖67は北魏の正光三年（五二二）銘の馮邕妻元氏墓誌の蓋の上面の刻紋である。中心に蓮の花があり、それを一匹の龍がとり巻き、四隅に攫天、拓遠等の榜題のある四頭の畏獸がゐる、この龍を頭上に支へてゐる。この四匹の畏獸は名が記されてはゐるが、その一つ一つの屬性については記録を缺き、名前から想像する他ない。然しこの畏獸といふジャンルの神が山神とか雷神のやうに、多く超地上的な世界に住む神であることは先に筆者が記した通りである。これらの畏獸によつて支へられた龍と、それに巻かれた蓮の花は天上の存在といふことになる。ここに再び天上の蓮の花が見出されたことになるが、この度は龍を伴つてゐる。圖68も同じ類である。この場合は礎石に作られたものであるが、中央に蓮の花があり、周圍を三匹の龍がとり巻いてゐる。この龍の下をみると、波頭のやうなものが連なるが、これは山並みである。とするとこれらの龍は天上の蓮を戴いて天空をかけてゐるのである。圖69は神龜三年（五二〇）銘の道教像である。上部に靈芝形の舌を出した龍が一對、胴を一絡みさせてゐるが、その頭の間に花を核にした旋回放射線紋の圓盤が表はされてゐる。これも蓮の花で象徵される天帝の星と龍といふ同じテーマと見られようか。圖70は敦煌の三九二隋窟の天井に畫かれた天

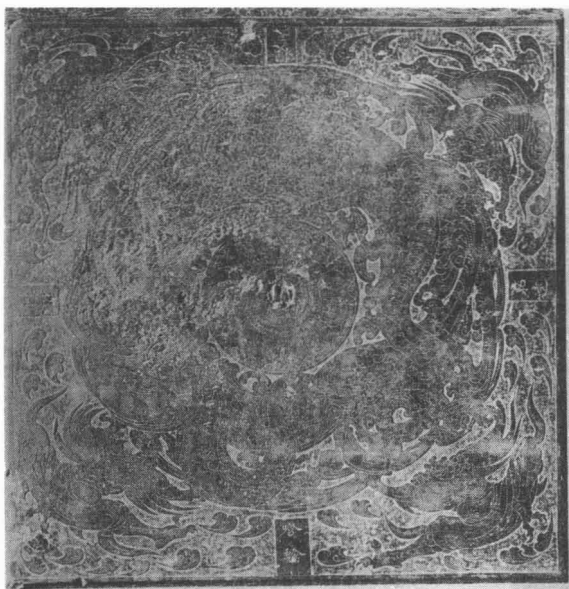


圖67 蓮の花と龍 馮邕妻元氏墓誌蓋 北魏 Museum of Fine Arts, Boston



圖68 蓮の花と龍 礎石 大同司馬金龍墓 北魏



圖69 旋回放射線の圓盤と龍 道像 北魏

蓋中央の畫像である。蓮の花の左右に龍が畫かれる。この蓮の花は漢鏡の四葉紋に使はれる、花瓣の線を一つながりの線で描く手法を踏襲してゐる。⁴⁹

天井の藻井の蓮の花に龍の伴ふ例は漢にもある。圖71は昌梨水庫一號墓の例である。前室の藻井にある。寫眞が貧弱な上に圖も不正確なものであるが、蓮の花の向ふに體をくねらせた龍が表はされてゐることが知られる。上圖で花の右に右向の龍の頭が辨別できよう。⁵⁰

中央の蓮の花とそれを取り巻く龍のテーマは、更に古く圖72の信陽長臺關二號墓出土の漆器の蓋にも見出される。つまりが蓮の花になり、その下の蓋の表、左端の少し下つた所に龍の頭がある。鼻先と下顎の先の反り上つた龍で、それに屬

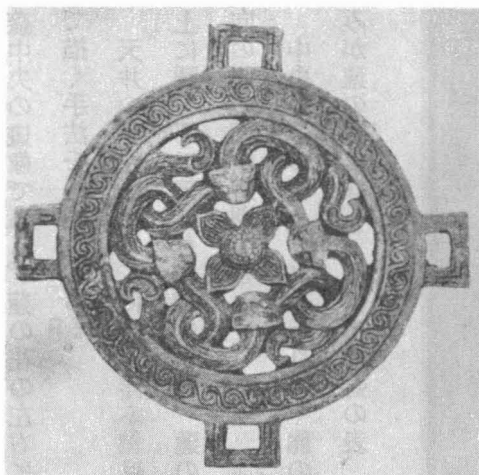


圖73 蓮の花と龍 飾金具 戰國 輝縣固圍村 1號墓

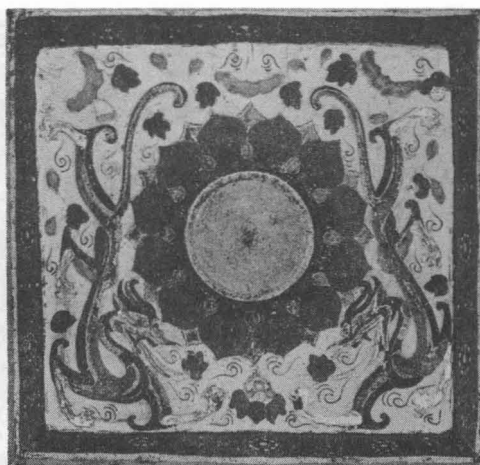


圖70 蓮の花と龍 敦煌392窟天井 隋



圖71 蓮の花と龍 東海昌梨水庫 1號墓前室天井 後漢



圖74 蓮の花と龍 小型盂 殷後期 安陽北岡

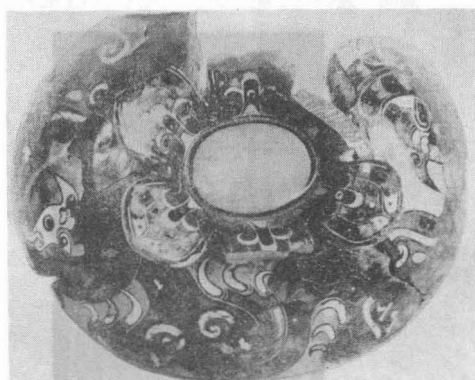


圖72 蓮の花と龍 漆器蓋 戰國 信陽長臺關 2號墓

すると思はれる三本の爪のついた足先が三つ、頭の上方に見出される。この墓は一號墓と隣接し、墓の作りもそれと似てをり、遠くない時期に作られたと考へられるが、一號墓は出土遺物から前四世紀後半のものと思われる。

圖73は輝縣趙固村一號墓出土の飾金具である。この墓は前五世紀後半頃のものである。中央に四瓣の花があり、その周圍に四匹の小龍がある。これも同じ類に入れられよう。これと似たやうな體をくねらせた龍が多數絡み合ひ、間に小ぶりの花を入れるテーマはこの頃に聞々あるが、花の中心部の表現は蓮の花とは似ない。これは圖73とは別類と思はれる。

圖74は安陽殷墟后北岡一〇〇五號墓出土の盃で、殷後期に屬する。中央に花瓣の尖つた花が眞直に立ち、その莖に嵌つた環に四匹の龍が附いてゐて、莖を軸に回轉するやうになつてゐる。龍は茸形の角のものと角貝形の角のものが交互になつてゐる。この盃に水を張れば、龍はこの花をめぐる水の中を遊び廻るといふ趣向である。この花は中心が細長い二等邊三角形の透しを入れた圓錐狀をなし、蓮の花に特徴的な花托が見えない。然しこれを開きかけの蓮の花を圖式的に表はしたものと解することが可能である。開いた花瓣を上から見た形が星形をなしてゐるのは、天體を象徵する蓮の花といふ意識に由來する可能性が大である。この花についてはまた第九節で觸れることになる。

以上に見た所により、漢から六朝へと天井乃至天上の蓮の花とそれをめぐる龍といふテーマが存續し、器物の裝飾ではあるがそれがまた戰國にまで遡ることが明かにされ、更に古く殷に淵源するらしいことが知られた。天上の蓮の花は前節までに述べた所により、天極星を代表し、その中の太一、天帝の座である小熊座のβ星を象徵し、天帝そのものの象徴でもあつたのである。さうするとの節でとり上げたテーマは、帝の象徴と龍との共存と言ひかへることができる。

ところで帝の所に龍があるといふテーマは古典の中に證據が見出されるものである。よく知られるのは『左傳』昭公二九年の條に見えるものである。蔡墨が象龍氏、御龍氏の由來を説いた話に、

昔、有鸛の叔安に裔子あり、董父といふ。實に甚だ龍を好み、能くその膏欲を求め、もつてこれに飲食せしむ。龍多

くこれに歸す。乃ち龍を擾畜し、帝舜に服事す。帝これに姓を賜ひて董といひ、氏を象龍といふ。……故に帝舜氏は世々畜龍あり。有夏の孔甲に及び、有帝に擾^{したが}ふ。帝これに乘龍を賜ふ。河、漢各々二なり。各々雌雄あり……

といふものである。舜の世に龍を飼ひ馴してこれに仕へる者がゐた。また夏の時代に帝が夏の孔甲に車に繋駕するための龍を賜つた、といふのである。傳説的な帝の舜、夏の王を評價する立場にある帝の所に、それに使役される龍がゐた、といふのである。

これとは全く別の話であるが、『說苑』正諫に、伍子胥が吳王の民と一緒に酒を飲まうとしたのを諫めるために引いた物語がある。

昔、白龍清冷の淵に下り、化して魚となる。漁者の豫且、射てその目に中つ。白龍上りて帝に訴ふ。天帝曰く、この時に當りて、なんじいづくにかなんじの形を置く、と。白龍こたへて曰く……と。夫れ白龍は天帝の貴畜なり……と。天帝の大事な飼ひものに白龍がゐたのであるが、怪我をさせられて天帝に訴へに行つたといふから、家畜といふより家來といふ感じである。

『左傳』の話は夏代にその後龍を飼ふ術がわからなくなつたので云々、といふことになるのであるが、龍が帝の所にゐることについては、由來の説明はあつても、居ること自体は當然のこととして認識されてゐる。『說苑』の物語りも白龍が魚に化けたりするからいけないので、龍が帝の家來で、天と地の間を往復することは説明なしに極く當り前のことと考へられてゐるのである。前引の圖像で天帝の象徴である天上の蓮の花の周圍に龍が表はされてゐるのは、この天帝の所には龍が居るといふ觀念に基くものに相違ない。

かうみると、先に圖60に引いた長沙馬王堆一號墓の帛畫で、最上部の天上世界で上方に女媧と日月があつてその下に一對の龍が表はされてゐるのも、この古の帝に従屬する龍と解される。



圖75 兩脇に小龍を伴ふ饗養 貞 殷後期

以上に記したのは圖像中で帝の象徴である蓮の花とそれに随伴する龍、古典中に見出される天帝とそれに従属する龍であるが、帝とそれに伴ふ龍といふテーマは、實は殷から西周前期頃にかけてさらに見られるものである。それは所謂饗養とその兩側に表はされる小型の龍のテーマ（圖75）である。所謂饗養が帝の像と考へられることは以前に筆者の論證した所である。⁵⁵ 饗養の脇に表はされる鳳は帝の使ひであり、それと同様な關係位置に配せられ、また往々鳳につかまる形で表はされるこの類の龍についても、これと同様な役割を想定した。⁵⁶ この饗養の脇に小龍を表はした圖像は、西周後期以後青銅彝器の上から姿を消し、圖像の形では消息を知ることができない。戰國時代に再び現れる天帝は蓮の花で象徴的に表はされるのであるが、殷から西周前期まで帝に随伴してゐた小龍は、やはり龍の姿で蓮の花に随伴してゐる。そして帝とそれに從属する龍は、傳説や物語の上にも存續してゐるのである。

天上の星に關聯した帝と龍については、先に記した天極星の帝とは別の星座がある。龍（房、心）の星座である。『史記』天官書、三四頁引用の句であるが

東宮は蒼龍の宿で房と心である。心は明堂である。その大きな星は天王で、前後の星は子屬である。

といひ、また『晉書』天文志三四頁前引の條に

心の三つの星は天王の正位である。中央の星を明堂といふ。天子の位で大辰となすとある。『史記』に出てくる心宿の大きな星、『晉書』に記される心宿の中央の星は

サソリ座の α 、アンタレスで、「天王」は先に記したやうに天帝のことである。即ち「龍」の星座の中心的な星が天帝なのである。天帝が龍の中にとり込まれてゐる、といふ具合である。ここにも天上における帝と龍の密接な結びつきがある。古代中國には複数の帝があり、天上の帝に當る星が幾つもあつて、別に差支へはない。圖像における帝の象徴と龍との隨伴については、このサソリ座の龍とアンタレスの帝も與つてゐたことは十分考へられる。ただ現在知られる限られた圖像的資料からは、それが同時代に何と稱せられた帝と、それとどのやうな關係にあるものとされた何といふ龍が、どのやうな狀況にあるのを表はしたのか、といった所までは知ることができない。

八 天の蓮の花と地上の蓮の花

『論衡』龍虛篇に次のやうな話がある。

且龍稟何氣而獨神、天有倉龍白虎、朱雀玄武之象也、地亦有龍虎鳥龜之物、四星之精、降生四獸、虎鳥龜不神、龍何故獨神

と、即ち、かつ龍のみ何の氣を稟けて獨り神なるや。天に倉（蒼）龍、白虎、朱雀、玄武の象あり。地にもまた龍、虎、鳥、龜の物あり。四星の精は降りて四獸を生む。虎鳥龜は神ならず。龍のみ何の故に獨り神なるや、と。これは龍が特に神的能力を持つものではないといふ論證なのであるが、これによつて、天上に四種の獸を象る星座があり、その星座の精が地上にそれに対応する四種の動物を生んだ、といふ通念が漢時代にあつたことが知られる。ここに出てくるのは天の四方の星宿の四神であるが、天の中央の星宿の象徴である蓮の花についても當然同様な觀念があつたに相違ない。即ち中宮の象である蓮の花の精が地上に降つて池の中の蓮を生んだ、といふ觀念である。天上の象は地上の物と對應してゐる。

故に天上の蓮を象つた天井の蓮は圖5に見るやうに、地上の蓮と同様周圍に魚が遊び、水鳥が飛びかふ形で表はされることがあつた。天の中央及び四方の星宿の象、蓮の花と四神がまた圖44のやうに床に敷かれる埽に象られるのも同様な觀念に由るものと見られる。蓮の花が日の光に感應して開閉すること⑤はよく知られる所である。蓮の花は天體の運動の中樞をなし、太陽を司るものとされる星の象徴の、地上における對應物とされるに十分な資格を持つものと言ふことができる。

九 蓮の花と山嶽、蓮の花の世界

先に戰國時代の蓮の花の例として圖17の壺を引いた。蓋に蓮の花を象る飾りがついてゐる。このやうな飾りは時代を遡り、春秋後期後半の圖76、更に古く春秋中期後半の同型式の壺の蓋、圖77にも見られる。ここに引いたやうな下腹がふくれ、斷面が隅圓の方形に近い形を持つた壺は、圖78のやうな春秋前期の壺を経、圖79のやうな西周後期後半の壺に遡る。圖76の花瓣形の飾りが圖7879の蓋の飾りの傳統を襲ふものであることは疑ひない。ところで、よく見ると圖78と76の蓋の飾りには違ひがある。圖76が後の時代にもつづいてゆく花の花瓣を寄せたものであるに對し、圖7879のものは凸字形を並べたものを一筆描きにした形の輪廓を持つのである。後者は例へば圖80の西周後期後半の壺の各部に繰返し使はれてゐるやうな、山紋を切り抜いて蓋にとりつけた、といふものである。この種の紋様が圖81に見るやうな戰國時代の例を経て漢代の山紋に變化してゆく所から、筆者は先にこれを山紋と呼んだ。然し前引の壺の蓋の裝飾で、何故花が山にすり變つたのであらうか。

圖80に引いたのは西周後期後半の山紋であるが、この類の紋様で一番時代の遡るのは西周中期のものである。圖82と84がその期の例である。この期のものは山の中腹に段がない所に特色がある。山の畫く線の凹みの中に入つてゐる紋様單位

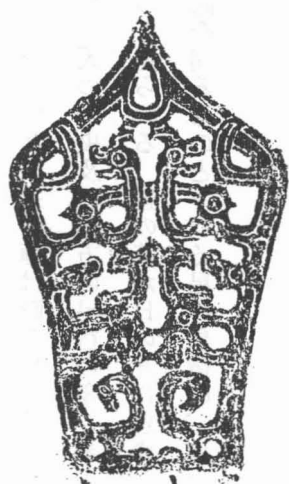


圖77 壺の蓋の蓮の花 春秋中期 新鄭



圖76 壺の蓋の蓮の花 春秋後期
壽縣蔡侯墓



圖79 壺の蓋の山紋形飾 西周後期
Asian Art Museum of San
Francisco, Avery Brundage
Collection



圖78 壺の蓋の山紋形飾 春秋前
期 京山平壩

は基本的にハート形をなすが、細部には小異がある。圖82のやうな單純な形、圖84のやうに曲り角から小突起の出るもの、圖83のやうにハート形の中にも小突起の出るもの等である。一つづきの波形の線の凹みにこの類のハート形を入れた紋様は

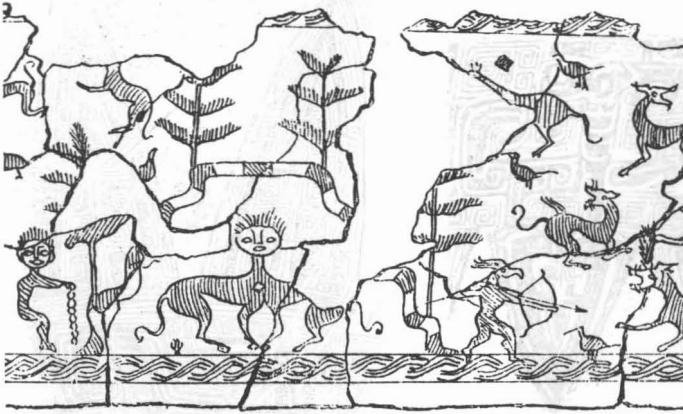


圖81 山紋 青銅鏡 戰國 輝縣琉璃閣1號墓



圖80 山紋 壺 西周後期
Asian Art Museum of
San Francisco, Avery
Brundage Collection

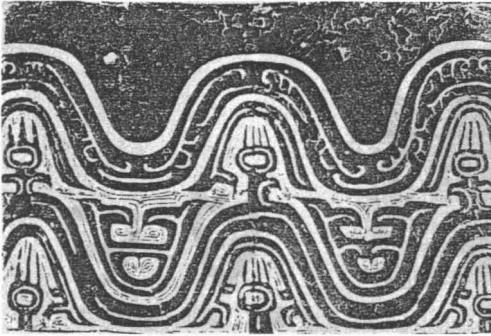


圖83 山紋 壺 西周中期 國立故宮博物院



圖82 山紋 卣 西周中期 黃縣歸城小劉莊

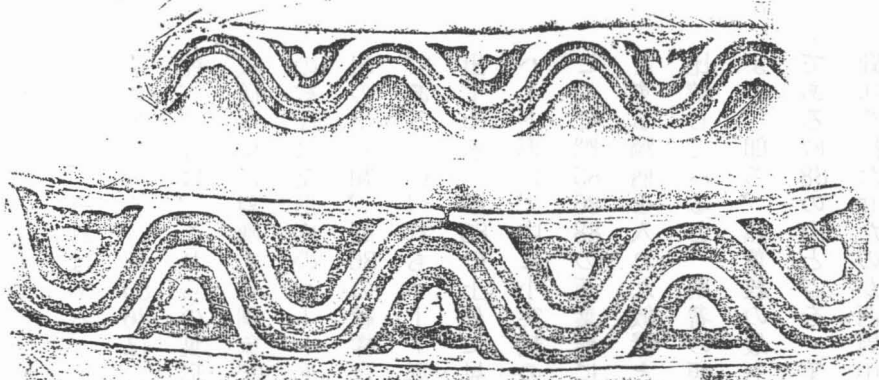


圖84 山紋 西周中期 壺

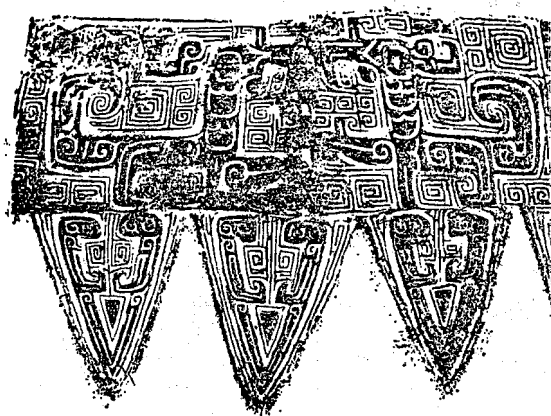


圖86 所謂蕉葉紋 鼎 殷後期 安陽殷墟婦好墓

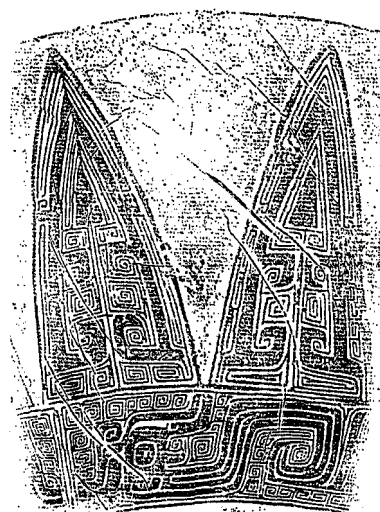


圖85 所謂蕉葉紋 有肩尊 殷後期 根津美術館

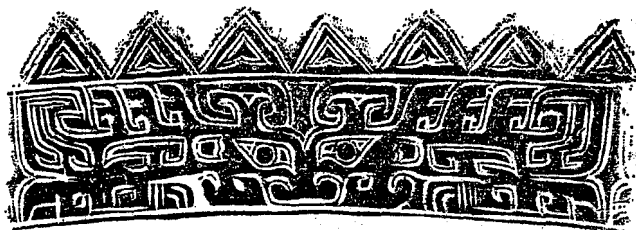


圖88 所謂蕉葉紋 玉簋 殷後期 安陽殷墟婦好墓

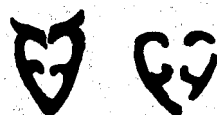


圖87 圖85, 86の蕉葉形中の紋様要素に對應する圖象記號

西周中期に始めて出現するのであるが、この種の紋様の先祖は古い時期にないものであらうか。それはある。殷後期に多い所謂蕉葉紋である。圖85 86はこの手の紋様の二種、圖87は、これらの葉形内に入れられた紋様單位に對應する圖象記號である。圖85の紋様は葉形内のハート形の曲り角に小突起の出る類、圖86の紋様はそれの出ない類である。いづれもハート形の中に小突起が出てゐる。圖88の上列に見る蕉葉形の中のハート形は、中に小突起の出ない類である。ここで圖85 86 88の蕉葉形にハート形を基本とする圖柄を入れた紋様と、圖82、84とを比較してみると、兩者の親子關係が覺られよう。即ち、蕉葉紋の最も幾何學的な表現である圖88の山と谷を一筆描きにして線に圓味を持たせたのが西周中期の波形をなした山紋の線であり、圖88のハート形の三つ

の角を圓くしたのが圖82で山の凹みの中にある圖柄、圖8586のハート形の先の尖りを圓くしたのが圖8384の同じ部分に入れた圖柄である。西周中期のものが山の凹みの中だけでなく、山と山の間の谷間にも同じ圖柄を入れてゐる所に、圖案化の進行が認められるのであるが。

ここで西周中期の山紋の祖先と知られた所謂蕉葉紋をもう一度見てみると、この紋様は口の開いた容器の頸から口にかけての部分に飾られることが多く、また容器の頸から腹に、逆さに使はれる例もある。前者の場合、この紋様は例へば圖17のやうに、花瓣が外に反った花の形になる。圖88のやうな低い三角形を並べた形は星形と言ふことができるが、その形の花が盃の中に作りつけられた例は圖74に引いた。先にこれを蓮の花と考へた。この短い花瓣のヴァリエーションである圖85は、有肩尊から採つたものであるが、このやうなものを外反りになつた器の口頸部に附けた形は、先に蓮の花に當てた圖17のやうなものと極めて近い。

以上に見た所によつて、蓮の花と山紋について次のやうな變遷がたどられることになる。即ち、殷後期に蓮の花を象つた圖柄として所謂蕉葉紋が現れ、西周中期にそれが圓味と持つた線で一筆描きにされて山紋に變る。この紋様は西周後期―春秋前期に多く使はれ、その後少くなるが戰國まで續き、ここでこれが山と意識された證據が出現、漢の山嶽の圖柄へと連續してゆく。一方春秋後期の壺の蓋の裝飾として、それまでの山紋は蓮の花に先祖歸りする。春秋後期から戰國時代は青銅器の器形に復古的なものが出現し、紋様要素にも西周のものが再出現する時代である。⁸⁹この情勢を勘案すれば、春秋後期にそれまでの山紋の形をとつてゐた花瓣狀の裝飾が蓮の花瓣の形に變へられたについては、それが本來そのやうに圖式化されず、もっと實物に近い花瓣形に象られたものであつたといふ知識が残存してをり、それに則つて復古的な表現が採られた、と解するのが妥當な解釋と考へられる。

圖858688に引いたのは、所謂蕉葉形の中にハート形を基本とする形態をもつた圖柄を入れたものであるが、この圖柄は

これに對應する圖象記號（圖87）があり、地域的な土着の神の圖像と考へられる⁶⁰。他に同時代には蕉葉形の中に頭を自分の身體の方に據り向けた一對の龍とか、同様な姿勢をとる一對の龍身鳥首神、或いは蟬紋を入れる類も多い。蕉葉形の中に神の圖像を入れる方式は前引の春秋中期後半の壺の蓋の例（圖77左）にも見出される。同じ類は圖17の戰國前期の壺の蓋の花弁にもある。花を鬼神の居處とする觀念の存續を窺はせるものである。西周中期に花を一筆描きにした形として産れた山紋が、戰國時代にそれに木を生やし、鬼神を棲はせて山嶽を表現するに使はれる（圖81）に當つては、本來この圖柄が鬼神の居處に使はれてゐたものであることに由來すると説明することができると考へる⁶¹。

右を引いた、鬼神の居處としての殷後期の華は、そこに入れられる圖像が地方的な鬼神である所から考へ、またそれが後に鬼神の居處としての山の圖像に轉用される所からも察せられるやうに、神的なものであるとはいへ、世界を天上と地上とに分けて考へた時、それは地上的なものである。

前漢時代から知られる、天の中央の星座の象、またそこにある太一、帝の座としての星の象としての蓮の花の形象は、いふまでもなく天上のものであつた。それは宇宙の運行の中心であることから、それはまた天上の蓮の花に對應する地上的なものとして、地上世界全體を象ることができた、と考へるべき資料がある。所謂佛像夔鳳鏡と呼ばれる類である。その年代について王仲殊⁶²は三國の吳の中期から後期、即ち三世紀中期前半から後半に流行したと考へてゐる。妥當な所と言へよう。この種の鏡は圓とそれに内接する星形（外周は孤線によつて形成される）と、先端がこの星形にとどく大きな四葉形とから成る枠があつて、その中に各種の鬼神像が配される、といふ型式をもつ（圖89）。星形と外周の圓とによつて形成される小さい多數の楕形の空間には各種の動物形の圖像が一つづつ入れられる。王仲殊前引論文にその個々の圖像の資料についての検討があるが、青龍、白虎、朱雀や日、月を表はすと考へられる三足鳥、兔、また王氏によつて十二宮中の蟹座と解される蟹など、天體を表はす動物が注目される。この空間は天上の世界と解されてゐたのである。星形の中の

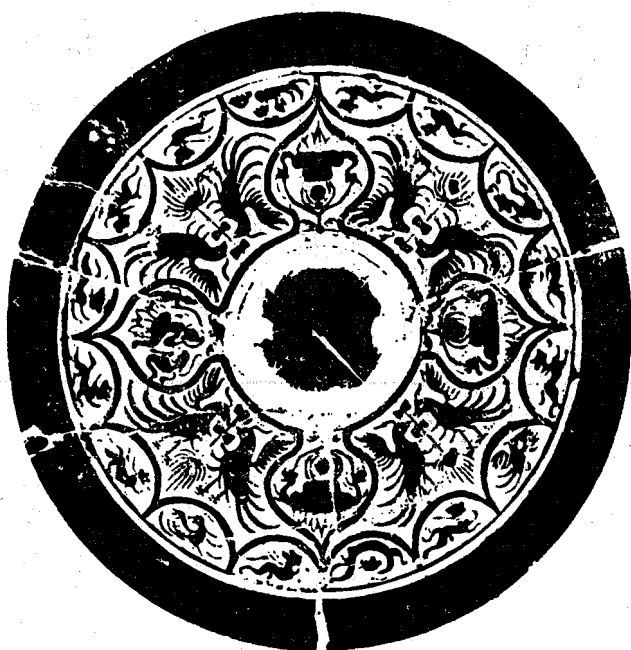


圖89 中に神像を配した蓮の花 鏡 吳 鄂城



圖90 中に神像を配した蓮の花 鏡 西晉 金華

大きな四葉形の中には鈕を中心に對稱の位置に西王母、東王公が入れられ、残りの二つには變化に富んだ組合せの鬼神が入れられる。小南一郎氏は後漢から六朝の鏡紋、墓室や佛教石窟の壁畫において、東西の方向は東王公と西王母といふ中國的な神によつてがつしりと占められてゐるのに對し、南北の方向については中國の神や神仙についても變化が多く、佛教的な圖像が配されるやうになるのもこの方角であることを指摘してゐる。⁶³ 有益な着眼であると考へる。ここで注意されるのは、この四葉形の中にゐる西王母、東王公は地上の神だといふことである。西王母はよく知られるやうに崑崙山に住むが、地上高く聳えて天に近いとはいへ、地の延長上にある場所である。四出する四つの葉形が地上の神の居場所に充て

られてゐる。といふのは、ここが地に屬する世界を表はすと考へられてゐたことを證するものである。例外的なヴァリエーションであるが、伴出物から西晉中期のものとされる金華出土のこの式の鏡（圖90）で四葉中に人像が入れられ、夫々に「聖子」「弟子仲由」「弟子顏淵」「弟子子貢」の文字の入れられた例がある。これも古への聖賢で地上世界の人間であり、この手の鏡で四葉形が地上世界を表はすといふ原則に牴觸してゐない。

この式の鏡で地上世界が四葉形、即ち蓮の花の形に象られてゐることが以上によつて明かにされたと考へる。この世界は蓮の花の世界と呼ぶことができるのではなからうか。ここで思ひ起されるのは華夏といふ言葉である。『書』武成に「華夏蠻貊」と出て來て、傳に華はかぶり物や衣服、その紋様の意味で、夏は大きい國といふ意味だと釋されている。華、夏二字はまた夫々獨立して中國を指すこともあった。ところで中國のことを華と呼ぶのについて、衣服やその紋様の美しく整つた國といふやうに解するのは、いかにも儒家臭が強すぎるやうに思はれる。中國を指すのに華と言ふ時、同時代の人々は卒直に右に見たやうな蓮の花＝華の世界を表象したと考へる。華は普通名詞としては勿論花の意味であるが、日本では花といへば櫻の花といふやうに、中國では漢時代頃「華」で蓮の花を指すことができた。華蚤といふと四葉形、即ち蓮の花を象つた蓋の骨の先端の飾金具を指すごとくである。自分の國のことを華と言つた時、漢、六朝の人は天の中心の象徴的な蓮の花に象徴された天極星を戴いた世界と同時に、その地上に投影されたものとしての圖89のやうな中國世界を表象したことは疑ひなからう。方格規矩四神鏡の地を表はす方形の中心にある四葉形を先に中央の星座の象徴と見たが、かう見てくると、それは同時代の人々にとつてまた同時に中國世界を象徴する地上的な華の世界とも意識されてゐた、と言ふことができさうである。

なほ附隨的なことであるが、圖89のやうな鏡について、中央の四葉形が地、星形と外周の圓の隙間が天を表はすとなると、兩者に挟まれた空間とそこに入れられた圖像についても解釋を加へておく必要があらう。そこに入れられた圖像は四

つとも同形で、翼を擴げた一對の鳥と、その間の棒状のものとから成る。鳥は長い尾羽根を持ち、その頭上からは後に軽く彎曲し羽冠がなびく。この時代によくある鳳凰の類の特徴である。一對の鳳凰の間にあるものは、上方に角張つた、或いは圓つこい塊状のものがついた棒状のもので、下端は房状になつてゐる。これが何を表はしたものか解釋がつけ難い。先に引いた、この手の鏡で時代の降る例(圖90)では、鳳凰の間にあるものが、外周から鈕座にまでとどく巨きな樹木になつてゐる。これであれば世界の果にある巨大な樹木の類と見ることが出来る。例へば第三章に引いた建木のやうなものである。それは衆帝が天に上つたり地上に下りたりする通路と考へられてゐる。その方向で考へれば、問題の鏡の鳳凰について、天帝の使ひとしてその意向を地上に傳へるものとしての鳳凰が想起されよう。この手の鏡で四葉形と星形の外側、即ち天と地との間の空間にある鳳凰と不明な棒状のものの組合さつた圖像は、何れにせよ天地の間を橋渡しするものとしてそこに配されてゐると解されるのではなからうか。一對の鳳凰の間にあるものについては今後の研究に俟たなければならぬのであるが。

注

- (1) 林一九八四
- (2) 林一九八五
- (3) Gyllensvard 1962, p. 46
- (4) 曾等一九五六、六頁。同様な情景は後漢中期の張衡の西京賦にもうたはれてゐる。
蒂倒茄於藻井、披紅葩之狎獵
とあるものである。蓮の莖を上下逆さ向きにラテルネン・デッケにくつつけ、べに色の花の花びらの長短のものが、重なり合つて密接して開いてゐる、といふのである。
- (5) 林一九七六、一一七—一一八頁
- (6) 小尾一九七四、九一頁に「あや模様影り込み」と譯されてゐるのは當を得ない。
- (7) 濟寧地區文物組、嘉祥縣文管所一九八二
- (8) 關野一九一六、二七一〇〇圖
- (9) この式の漢代瓦當紋は變化に富み(例へば石興邦等一九八四、圖三七參照)、早く秦時代から他の型式の葉形と組合せられるものもあつて(例へば張一九八二、圖一、三、二、三、四、八等)、單純には片附けられない。それらについて分類、解説を行ふ餘裕はないので、ここにはこの典型的な例を一種類引くに留めたい。
- (10) 湖北省荊州地區博物館一九八四、附表一
- (11) 中國科學院考古研究所一九五六、圖版四六、5。臺を除いた豆のみを

比較。

(12) 蓮の花瓣はちりれんげのやうに内側が窪むが、開いた花弁の先の方はこのやうに外反することがある。

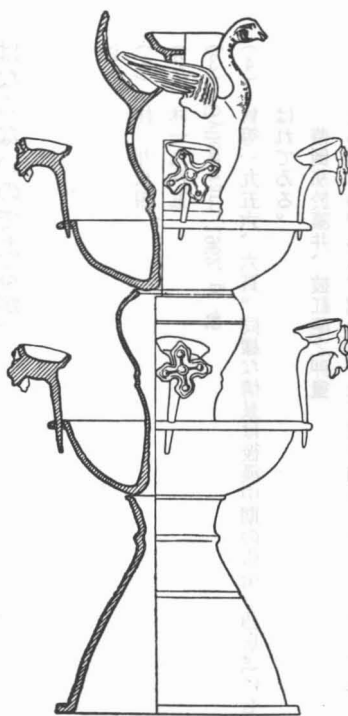


圖91 燈明皿を伴ふ蓮の花 陶器
後漢 陝縣劉家渠

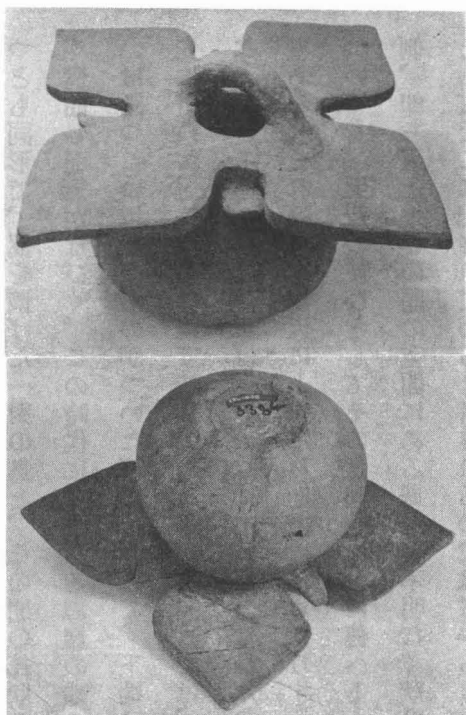


圖92 蓮の花を象る遺物 灰陶 漢
Courtesy of the Royal Ontario Museum, Toronto, Canada. (Far Eastern Department)

(13)

大臣注のテキストには光耀に作る。

(14)

陶製明器であるが、圖91のやうな、重層の盤の縁に四葉形蓮の花が挿され、それに燈明皿が附けられた器がある。蓮の花が光り輝くといふ觀念を、蓮の花に燈火をとりつけることによつて現實化したものと解される。

他に、光り輝く蓮の花といふ觀念に關係があるのではないかと思はれる遺物に圖92のやうなものがある。大きな子房のついた四葉形、即ち蓮の花の形が灰陶で作られ、背面に太い丈夫な吊り手のやうなものがとりつけられてゐる。花の上面には赤と白の彩色が認められるが背面にはない。この彩色及び吊り手狀の附屬物から判斷して、これは花の上面を下にして、高い所に吊して下から見るための遺物と考へられる。とすると、これはこの論文の第二節に引いた靈光殿賦、注(4)に引いた西京賦のやうに天井に逆さに蓮の花を植ゑるといふ意識で、ランプや電燈のやうに天井から吊し、もつて光明となしたものでないかと思はれる。

(15)

小南一郎氏の教示を受けた。

(16)

郭一九八一、五六―五八頁

(17)

朝鮮畫報社出版部一九八五、六〇頁

(18)

さうすると圖1920で鋸齒紋の外に雲氣紋があるのは、漢代に日月星辰のかかる天空に雲氣が畫かれる(例へば河南省文化局文物工作隊一九六四、圖版三)のと同じ意味合ひで、この光芒の鑄出された物體が天體になぞらへられてゐることを示すものと解される。

(19)

林一九六三、一一―一頁

(20)

劉一九八五、一五―一六頁

(21)

林一九七三、二一―四頁

(22)

注(18)参照

(23)

安田、近藤一九七一、四六八頁

(24)

『史記』に記される天極星は一番明るい太一の常居と三公の計四星で

あるが、『史記』天官書前引の條の『索隱』所引の『春秋合誠圖』には「北辰、其星五」といふ。これは先の四星を結んだ線の北への延長線上にあり、圓運動の中心あたりにある小さい星をもう一つ足したものである（『史記』前引條の『考證』）。

- (25) この星は後に帝星の名で呼ばれるに至る。『晉書』天文志にはこの名は見えない。天文關係の文獻で早いのは隋の丹元子『步天歌』西歌の紫微垣内の星の條に「帝星最明太子次」とあるものである（梅文鼎『中西經星同異考』所引）（山田慶兒氏の教示を受けた）。他の方面の文獻中で、ここで問題の漢、六朝時代に帝星の名が使はれたかどうかはまだ調べてゐない。帝星の名稱の始まりの年代のこともあるし、また帝に關する星は他にも出て來ることもあり、まぎらはしさを避け、この帝星の名はこの論文では使はないことにする。

- (26) 當研究所の宮崎法子氏からこの資料の提供を受けた。

- (27) 林一九七四、二二五—二二八頁

- (28) 西側室天井にも同様な蓮の花がある。高句麗文化展（一九八五年一一—二月、於神戸市立博物館）出陳模型で觀察。

- (29) 甘肅省博物館一九七九、一〇—一一頁

- (30) 例へば中央美術學院實用美術系研究室一九五三參照。

- (31) 林一九八五、六〇—六一頁。

- (32) 敦煌文物研究所一九八〇、圖版一四〇—一四四。

- (33) 林良一氏の蓮華紋を西域から佛教美術の傳來とともに中國に輸入されたものとする考へ（林良一九七六、七〇頁）には賛同できない。なほ熊海堂等は（熊等一九八二）中國の蓮はインドから入つて來たもので、佛教の弘通と共にその裝飾が盛行したと考へているが、思ひ違ひであらう。

- (34) 河北省文物管理處、河北省博物館一九七五、三三頁。

- (35) Canman 1950, pp. 107, 113

- (36) *ibid.*, fig. 1

- (37) *ibid.*, p. 107

- (38) 林一九七三、二四—三一頁。

- (39) 星座の華蓋の柄が曲つてゐるが、そのやうな柄の蓋が實際に使はれてゐたことについては先に圖を引いて説明した（林一九七三、二九—三〇頁）。

- (40) この資料は岡村秀典氏の教示を受けた。なほこの雲車は鹿に乗つた仙人が先導してゐる他、空間の大部分は神獸鏡によくみる「獸」（林一九七八）によつて占められ、先の雲車と先導との間と、右上及び左上の乳の外側とに、小さな神の坐像が表はされてゐるが、それらは何の神であるか不明であり、華蓋の下に坐する神の素性を推測する手がかりも見出すことができない。

- (41) 岡村秀典氏の意見をきく。

- (42) 山東省博物館、山東省文物考古研究所一九八二、四九頁、山東省文物管理委員會一九五五、四九頁。

- (43) 富岡一九二〇、一二三頁、圖二二。

- (44) カールグレンは (Karlgren 1934, p. 62) May you have king's days and months と譯すが吉祥の意味をなさない。

- (45) この資料については阪井一九八三、六—七頁に詳細な解説があり、また日月のある北魏石彫の例が挙げられてゐる。

- (46) 道教像に現れる日月の意味については松原三郎の解釋がある（松原一九五四、三一頁）。

- (47) 林一九八五、五四—六三頁。

- (48) 西田一九八五、八四頁。

- (49) 林良一氏もこの式天井の蓮の花の表現の特徴に注意してゐる（林良一九七六、七二頁）。

- (50) 外に、圖48の嘉峪關の丁五號墓で中央に蓮の花を畫いた伏斗形天井の下、西王母東王公の畫かれるレヴェルの上部、四壁に、頭を下にした龍が畫かれる（圖48。甘肅省博物館一九七九、八頁）。これも同じ蓮の花と龍のテーマの一つに加へて良ささうであるが、この場合、蓮の花と龍との間に少し距離があるので注に廻した。

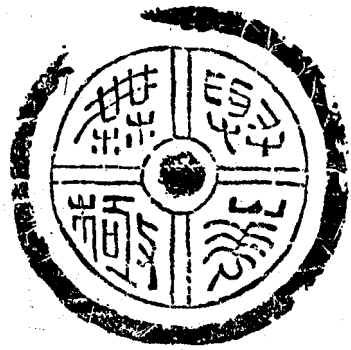


圖93 「與華無極」瓦當 漢 華陰
華倉遺蹟

(51) 河南省文化局文物工作隊

一九五八、七九頁。

(52) 例へば林一九六九、圖九、

2。

(53) 昔有饒叔安、有裔子曰董

父、實甚好龍、能求其善

欲、以飲食之、龍多歸之、

乃擾畜龍、以服事帝舜、

帝賜之姓曰董、氏曰豢龍

……故帝舜氏世有畜龍、

(54) 及有夏孔甲、擾于有帝、帝賜之乘龍、河漢各二、各有雌雄……

昔白龍下清冷之淵、化爲魚、漁者豫且、射中其目、白龍上訴天帝、天

帝曰、當是之時、若安置而形、白龍對曰……夫白龍天帝之貴畜也……

他にこれとよく似た物語が漢代にある。『楚辭』、天問「胡朕夫河

伯而妻彼維嬪」の王逸注に

傳曰、河伯化爲白龍、遊于水旁、羿見狀之、眇其左目、河伯上訴天

帝曰、爲我殺羿、天帝曰、爾何故得見狀、河伯曰、我時化爲白龍出

遊、天帝曰、使汝深守神靈、羿何從得犯汝、今爲蟲獸、當爲人所狀、

固其宜也、羿何罪歟

といふものである、この場合は白龍が魚に化けたのでなく、河伯が白

龍に化けて遊んでいて羿に目を射られたのである。この話でも河伯は

天帝に敵を討つてくれるやう訴へに行つてをり、白龍に姿を變へるこ

ともある河伯は、天帝の家來と意識されている。ただこの白龍は地

上の大物の神である河伯で、平常は地上世界に住むものである點、

『說苑』の白龍とは相違がある。天帝と地上の有力な神との主従關係

(55) 林一九八四

(56) 林一九八四、七八一八〇頁

(57) 坂本裕二一九七七(五十六頁)によると正確には次のごとくである。

開花に必要な最低氣温は一八度ぐらいであり、光の作用もかなり關
係する。開花期間は四日間で、第三日までは生長があり、花瓣の表
裏の生長ホルモンが光の影響で移動して、花瓣の開閉をおこしめ
る……

第一日目 東洋産ハスは早朝四、五時頃から外瓣より一分間に約〇

・二センチずつゆるみ出し、三―五センチの口をひら
いたとくり形となる。……八時頃に閉じはじめる。

第二日目 眞夜中の一時頃より外瓣が動きはじめ、朝七時頃から九

時頃までが満開で、おわん形をなす。……閉花は正午頃

第三日目 二日目の開花と大體同様であるが六時頃におわん形にな

り、九時頃には皿形になって、瓣の生長がほとんど止り、
完全に閉じることなく、おわん形に開いたままである。

第四日目 東洋産ハスは午後に……散ってしまう。

(58) 林一九六九、四六―五一頁

(59) 林一九八〇、二八―五一頁

(60) 林一九八四、一四―二四頁

(61) 蓮の花ハ華と山といふと華山が思ひ浮ぶ。華山は五嶽の中の西嶽とし

て數へられ、漢代よりその廟があり『風俗通義』山澤篇、五嶽の條、

神山と考へられてゐた。前漢末から後漢初の方格規矩四神鏡の銘に

「上華山見仙人、食玉英飲澧泉……」(富岡一九二〇、四五頁、圖版

六、f)とあるやうに、仙人の住む所と考へられ、また「上華山鳳凰

集、見神囚保長久……」(羅振玉一九二九、八、鏡の寫眞、拓本は知

られない)と鳳凰が集り、神人の居る所と見られてゐる。華陰の漢代

華倉遺蹟から出る漢代瓦當に「與華無極」の文字がある(陝西省考古

研究所華倉考古隊一九八二)(圖93)のは、漢代瓦當文字に「與天無

極」といふ(陳直一九六三、二八頁)のと同型式の語で、華、即ち華

山（漢時代、華山の華は山に从つて華と書かれるのが常であつた（右に引いた鏡銘、瓦當の文字、また王利器一九八一、四五三頁、注二四）がこの邊の土地の人間にとつて天と同格の神的存在と考へられてゐたことを示すものである。然しこの華山が華を象るとか、その神が蓮の花と關係があるといふやうな所傳はない。『風俗通義』前引の所に「華、華也、萬物滋熟、變華於西方也」と言ひ、また『白虎通』巡狩篇に「西方爲華山者、華之言穫也、言萬物成熟可得穫也」といふやうに、華は普通で別の語に言ひかへて解説されてゐて、直接華と結びつけられてゐた形跡はない。

(62) 王一九八五、六四〇頁

(63) 小南一九八三

(64) 冕服采章曰華、大國曰夏。また『左傳』定公十年「裔不謀夏、夷不亂華」の條の疏にも「夏、大也、中國有禮儀之大、故稱夏、有服章之美謂之華、華夏一也」と同方向に解してゐる。

(65) 前注『左傳』疏參照

(66) 林一九七六、三〇八一—三〇九頁、圖7—10

(67) 林一九八四、二七—三三頁

圖出所目録

- 圖1 中國社會科學院考古研究所、河北省文物管理處一九八〇、圖版二二七、
1
圖2 京都大學人文科學研究所考古資料（以下京大人文研考古資料と略稱）
圖3 曾等一九五六、圖版一八、(1)、(2)、(4)、圖版八一
圖4 安等一九七二、圖版七、6
圖5 濟寧地區文物組等一九八二、圖八、一三、七
圖6 山東省博物館等一九八二、圖四八七
圖7 山東省文物考古研究所等一九八二、圖版二二八、4、5
圖8 中華人民共和國四川省文物展、五一
圖9 『文物』一九六〇、一、四頁

中國古代における蓮の花の象徴

- 圖10 湖北省荊州地區博物館一九八四、圖版六〇、3
圖11 同右、圖版六二、1
圖12 王一九五四、挿圖九、5
圖13 郭一九五九、圖一四、四二、1
圖14 湖南省博物館一九六三、圖二〇、14
圖15 湖南省博物館等一九八一、圖一〇、8
圖16 山西省文物工作委員會一九八〇、一〇五
圖17 郭一九五九、圖版一四、1、3、四五、1
圖18 郭一九八一、五七頁
圖19 廣西壯族自治區文物工作隊一九八五、圖一九、1
圖20 同右、圖一九、2
圖21 廣州市文物管理委員會等一九八一、圖一七〇、6
圖22 京大人文研考古資料
圖23 黃一九五四、圖版五九、圖61
圖24 新疆維吾爾自治區博物館一九六〇、二頁圖4
圖25 『中華人民共和國シルクロード文物展』一一三
圖26 山東省博物館等一九八二、圖一三〇
圖27 朝鮮畫報社出版部一九八五、一七六
圖28 京大人文研考古資料
圖29 林一九七六、九—一六
圖30 京大人文研考古資料
圖31 梅原一九三五、圖版一〇、5
圖32 同右、圖版一二、3
圖33 鄭州市博物館一九七九、圖一九、3、4
圖34 同右、圖一九、1、9
圖35 李一九六六、圖版五二、24
圖36 河南省文化局文物工作隊一九五九、圖三四、1、2
圖37 中國科學院考古研究所一九五九、圖版一九、4、6
圖38 夏一九八四、圖六

- 圖 39 劉一九八五、圖三
- 圖 40 陝西省考古研究所鳳翔發掘隊 一九六三、圖一、6
- 圖 41 張一九八二、圖二、1、10
- 圖 42 同右、圖一、11、12
- 圖 43 京大人文研考古資料
- 圖 44 京大人文研考古資料
- 圖 45 林一九七四、圖一
- 圖 46 同右、挿圖一
- 圖 47 朝鮮畫報社出版部一九八五、二八
- 圖 48 甘肅省博物館一九七九、圖一〇、圖版二、1
- 圖 49 中國社會科學院考古研究所一九八〇a、圖版八〇
- 圖 50 河南省博物館等一九八〇、圖版一、2、挿圖一
- 圖 51 鄭州市博物館一九八三、圖版五、5、圖四
- 圖 52 北京市文物工作隊一九八四、圖三
- 圖 53 河北省文化局文物工作隊一九六二、圖二六
- 圖 54 遼寧省博物館等一九八五、圖四
- 圖 55 松本一九三七、圖版一六一、a
- 圖 56 中西對照天文圖
- 圖 57 梅原一九三八、圖版四二、(-)
- 圖 58 林一九七三、圖二一
- 圖 59 山東省博物館等一九八二、圖五一八
- 圖 60 安一九七三、圖一
- 圖 61 四川省文物管理委員會一九五六、三六頁下圖
- 圖 62 耀生一九六五、圖三
- 圖 63 京大人文研考古資料
- 圖 64 耀生一九六五、圖一、2
- 圖 65 京大人文研考古資料
- 圖 66 京大人文研考古資料
- 圖 67 ボストン美術館寫真
- 圖 68 出土文物展工作組一九七二、一四六下
- 圖 69 京大人文研考古資料
- 圖 70 敦煌文物研究所一九八一、一六一
- 圖 71 南京博物院一九五七、三七頁左上圖
- 圖 72 河南省文化局文物工作隊一九五八、圖版九、1
- 圖 73 中國科學院考古研究所一九五六、圖版九一、3
- 圖 74 上 陳一九五四、圖一〇甲
- 下 林一九六九、圖九、3
- 圖 75 京大人文研考古資料
- 圖 76 安徽省文物管理委員會等一九五六、圖版八
- 圖 77 孫一九三九、一〇〇、一〇一
- 圖 78 夏一九七二、圖四
- 圖 79 d'Argence 1966, Pl. 35A
- 圖 80 d'Argence 1966, Pl. 34B
- 圖 81 郭一九五九、圖二九
- 圖 82 齊一九七二、圖七
- 圖 83 容一九三四、九九
- 圖 84 京大人文研考古資料
- 圖 85 京大人文研考古資料
- 圖 86 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖一、5
- 圖 87 林一九八四、圖12、20
- 圖 88 中國社會科學院考古研究所一九八〇、圖七一、7
- 圖 89 王一九八五、圖一
- 圖 90 王一九八五、圖二
- 圖 91 黃河水庫考古隊一九六五、圖二三、2
- 圖 92 京大人文研考古資料
- 圖 93 陝西省考古研究所華倉考古隊一九八二、圖八、1

引用文獻目錄

日本文・中國文

- 安徽省文物管理委員會、安徽省博物館一九五六『壽縣蔡侯墓出土遺物』北京
 安金槐、王與剛一九七二『密縣打虎亭漢代畫像石墓和壁畫墓』『文物』一九七二、一〇、四九—五五頁
 安志敏一九七三『長沙新發現的西漢帛畫試探』『考古』一九七三、一、四三—五三頁
 梅原未治一九三五『漢以前の古鏡の研究』京都
 小尾郊一九七四『文選（文章編）一』『全釋漢文大系』26 東京
 王仲殊一九五四『洛陽燒溝附近的戰國墓』『考古學報』八、一二七—一六二頁
 王仲殊一九八五『論吳晉時期的佛像變鳳鏡——爲紀念夏鼎先生考古五十年而作——』『考古』一九八五、七、六三六—六四三頁
 王利器一九八一『風俗通義校注』北京
 河南省博物館、焦作市博物館一九八〇『焦作金代壁畫墓發掘簡報』『河南文博通訊』一九八〇、四、一一六頁
 河南省文化局文物工作隊一九五八『信陽長臺關第二號楚墓的發掘』『考古通訊』一九五八、一一、七九—八〇頁
 河南省文化局文物工作隊一九五九『鄭州二里岡』北京
 河南省文化局文物工作隊一九六四『洛陽西漢壁畫墓發掘報告』『考古學報』一九六四、二、一〇七—一二四頁
 河北省文化局文物工作隊一九六二『河北井陘縣柿莊宋墓發掘報告』『考古學報』一九六二、二、三一—七二頁
 河北省文物管理處、河北省博物館一九七五『河北宣化遼壁畫墓發掘簡報』『文物』一九七五、八、三一—三七頁
 夏鼎一九七二『無產階級文化大革命中的考古新發現』『考古』一九七二、一、二九—四二頁
 夏鼎一九八四『所謂玉璫璣不啻是天文儀器』『考古學報』一九八四、四、四〇—四一〇頁
- 郭德維一九八一『曾侯乙墓中漆匱上日月和伏羲、女媧圖象試釋』『江漢考古』一九八一、一、五六—六〇、七六頁
 郭寶鈞一九五九『山彪鎮與琉璃閣』北京
 甘肅省博物館一九七九『酒泉、嘉峪關晉墓的發掘』『文物』一九七九、六、一一—一七頁
 小南一郎一九八三『佛教中國傳播の一樣相——圖像配置からの考察——』『展覧アジアの考古學——樋口隆康教授退官記念論集——』東京、五一—五二五頁
 湖南省博物館一九六三『湖南常德德山楚墓發掘報告』『考古』一九六三、九、四六一—四七三、四七九
 湖南省博物館、益陽縣文化館一九八一『湖南益陽戰國兩漢墓』『考古學報』一九八一、四、五一—五四八
 湖北省荊州地區博物館一九八四『江陵雨臺山楚墓』北京
 黃河水庫考古隊一九六五『河南陝縣劉家渠漢墓』『考古學報』一九六五、一、一〇七—一六七頁
 黃文弼一九五四『吐魯番考古記』北京
 廣州市文物管理委員會、廣州市博物館一九八一『廣州漢墓』北京
 廣西壯族自治區文物工作隊一九八五『廣西貴縣北郊漢墓』『考古』一九八五、三、一九七—二一五頁
 濟寧地區文物組、嘉祥縣文管所一九八二『山東嘉祥宋山一九八〇年出土的漢畫像石』『文物』一九八二、五、六〇—七〇頁
 阪井卓一九八三『光背々面に駿鳥・蟬餘のある北魏三尊石佛』『資料紹介』『美をつくし』一〇三號、四—七頁
 坂本祐二一九七七『蓮』『ものと人間の文化史』21 東京
 山西省文物工作委員會一九八〇『山西出土文物』
 山東省博物館、山東省文物考古研究所一九八二『山東漢畫像石選集』濟南
 山東省文物管理委員會一九五五『濟南大觀園的一個漢墓』『考古通訊』一九五五、四、四八—五〇頁
 山東省文物考古研究所、山東省博物館、濟寧地區文物組、曲阜縣文管會一九

八二『曲阜魯國故城』濟寧

四川省文物管理委員會一九五六『四川新繁清白鄉東漢畫像磚墓清理簡報』

『文物』一九五六、六、三六一—三八頁

出土文物展工作組一九七二『文化大革命期間出土文物』第一輯、北京

新疆維吾爾自治區博物館一九六〇『新疆吐魯番阿斯塔那北區墓葬發掘簡報』

『文物』一九六〇、六、一三一—二一

齊文濤一九七二『概述近年山東出土的商周青銅器』『文物』一九七二、五、三—一八

石興邦、馬建熙、孫德潤『長陵建制及其有關問題——漢長陵勘察記存』『考古與文物』一九八四、二、三二—四五頁

關野貞一九一六『支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾』東京

陝西省考古研究所華倉考古隊一九八二『漢華倉遺址發掘簡報』『考古與文物』一九八二、六、二〇—二八頁

陝西省考古研究所鳳翔發掘隊一九六二『陝西鳳翔南古城村遺址試掘記』『考古』一九六二、九、四九三—四九五、四九八頁

曾昭燭、蔣寶庚、黎忠義一九五六『沂南古畫像石墓發掘報告』北京

孫海波一九三九『新鄭彝器』北平

中央美術學院實用美術系研究室一九五三『敦煌藻井圖案』北京

『中華人民共和國四川省文物展』（展覽會カタログ）一九八五、廣島

『中華人民共和國シルクロード文物展』（展覽會カタログ）東京

中國科學院考古研究所一九五六『輝縣發掘報告』北京

中國科學院考古研究所一九五九『洛陽中州路』北京

中國社會科學院考古研究所一九八〇『殷虛婦好墓』北京

中國社會科學院考古研究所一九八〇『中國古代天文文物圖集』北京

中國社會科學院考古研究所、河北省文物管理處一九八〇『滿城漢墓發掘報告』北京

告』北京

中西對照天文圖、『考古』一九七五、三折込

梅原末治一九三八『近畿地方古墳の調査』三、京都

張旭一九八二『秦瓦當藝術』『考古與文物』一九八二、二、六二—六六、六

一頁

朝鮮畫報社出版部一九八五『高句麗古墳壁畫』東京

陳直一九六三『秦漢瓦當概述』『文物』一九六三、一一、一九—四三頁

陳夢家一九五四『殷代銅器』『考古學報』七、一五—五九頁

鄭州市博物館一九七九『鄭州大河村遺址發掘報告』『考古學報』一九七九、三、三〇—一三七五

鄭州市博物館一九八三『鄭州開元寺宋代塔基清理簡報』『中原文物』一九八三、一、一四—一八、七五頁

富岡謙藏一九二〇『古鏡の研究』京都

敦煌文物研究所一九八〇『敦煌莫高窟』一（中國石窟）東京

敦煌文物研究所一九八一『敦煌莫高窟』二（中國石窟）東京

南京博物院一九五七『昌梨水庫漢墓群發掘簡報』『文物』一九五七、一二、二九—四〇頁

西田守夫一九八五『漢式鏡の芝草紋』『三上次男博士喜壽記念論文集』考古編、七七—九八頁

林巳奈夫一九六三『殷周時代の幾何學的な紋様一、二について』『東方學』二六、一一—一六頁

林巳奈夫一九六九『天子の衣裳の十二章』『史林』五二、六、三七—八九頁

林巳奈夫一九七三『漢鏡の圖柄二、三について』『東方學報』四四、一一—一六頁

五頁

林巳奈夫一九七四『漢代鬼神の世界』『東方學報』四六、二三—三〇六頁

林巳奈夫編一九七六『漢代の文物』京都

林巳奈夫一九七八『漢鏡の圖柄二、三について（續）』『東方學報』五〇、五七—七四頁

林巳奈夫一九八〇『周禮』の六尊六彝と考古遺物』『東方學報』五二、一一—一二頁

林巳奈夫一九八四『所謂饗養紋は何を表はしたものか——同時代資料による論證』『東方學報』五八、一一—九七頁

林巳奈夫一九八五『獸環・鋪首の若干をめぐって』『東方學報』五七、一一—一二頁

七四

林良一九七六「佛教美術の裝飾文様、⑦、蓮華(4)」『佛教藝術』一〇六、六四—八五頁

北京市文物工作隊一九八四「遼韓佚墓發掘報告」『考古學報』一九八四、三、三六一—三八〇

松原三郎一九五四「北魏の道教像」『佛教藝術』二二、二九—三六頁

松本榮一九三七「敦煌畫の研究」東京
安田二郎、近藤光男一九七一「戴震集」『中國文明選』8、東京、名古屋、大阪、北九州

熊海堂、徐青、程立憲一九八二「青瓷器蓮花紋裝飾溯源—兼談蓮花、蓮花紋裝飾與佛教傳播的關係」『江西歷史文物』一九八二、三、八六—九二

容庚一九三四「武英殿彝器圖錄」北平
羅振玉「漢兩京以來鏡銘集錄」『遼居雜著』

羅振玉「漢兩京以來鏡銘集錄」『遼居雜著』

李濟一九六六『小屯』第三本、殷虛器物、甲編、陶器、上輯、南港

劉敦愿一九八五「試論中國青銅時代藝術中的東方史前文化因素」『史前研究』一九八五、四、一二—一八

遼寧省博物館、凌源縣文化館一九八五「凌源富家屯元墓」『文物』一九八五、六、五五—六四、七四頁

歐文

d'Argencé, René-Yvon Lefebvre 1966: *Ancient Chinese Bronzes in the Avery Brundage Collection*, San Francisco

Camman, S. 1950: Suggested Origin of the Tibetan Mandala Paintings, *The Art Quarterly*, Spring 1950, pp. 106-117

Gyllensvärd, B. 1962: The First Floral Patterns on Chinese Bronzes, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 34, pp. 29-52

Karlgren, B. 1934: Early Chinese Mirror Inscriptions, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no. 6, pp. 9-79